

太 田 遺 跡

— 一般府道大阪羽曳野線（八尾富田林線）事業に伴う発掘調査 —

令和7年3月

大阪府教育委員会

太 田 遺 跡

— 一般府道大阪羽曳野線（八尾富田林線）事業に伴う発掘調査 —

大阪府教育委員会

序文

本書で報告します太田遺跡は、八尾市南西部に位置し、大和川より南側において藤井寺市に位置する遺跡です。

今回の調査では、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての集落跡を見つけることができました。当遺跡と隣接します津堂遺跡ではこれまでに平安時代後期から鎌倉時代中期にかけての遺構が多数発見されており、当遺跡を含め一帯は荘園に関する集落遺跡と考えられております。今回の調査におきましても、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての遺構が検出され、同時代の遺物が多数出土しました。これまでの調査成果について新たな知見を加えるもので、この地域の歴史を解明するうえで重要な成果となりました。

最後になりましたが、調査の実施にあたり地元関係者ならびに藤井寺市教育委員会の方々には多大なご協力をいただきましたことに深く感謝いたします。

今後とも本府文化財保護行政へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和7年3月

大阪府教育庁文化財保護課長
道上 正俊

例言

1. 本書は、大阪府教育委員会が都市整備部の依頼を受けて令和2～6年度に実施した、一般府道大阪羽曳野線（八尾富田林線）事業に伴う、藤井寺市津堂四丁目地内所在の太田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 確認調査は文化財保護課調査事業グループ技師 奈良拓弥・技師 新尺雅弘（令和2年度）、発掘調査は同課同グループ技師 奈良拓弥（令和2年度）、副主査 原田昌浩（令和3年度）、副主査 井上知花（令和5年度）、技師 北川咲子（令和6年度）を担当者として実施した。
3. 遺物整理は、同課調査管理グループ主査 原田昌浩（令和4年度）、専門員 藤田道子（令和3～6年度）・技師 竹原伸次（令和3～6年度）を担当者として実施した。
4. 確認調査の調査番号は20005、発掘調査の調査番号は20018・21001・23032・24003である。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は発掘調査担当者が行い、遺物写真はイトーフォトに委託した。
6. 発掘調査にあたっては、20018・21001の空中写真測量および図化作業を写測エンジニアリング株式会社に委託して実施した。
7. 自然科学分析については株式会社イビソクに委託し、その成果を第5章に掲載した。
8. 101溝より出土した骨については、丸山真史（東海大学）の助言を得た。
9. 本書は第1～4・6章を奈良が執筆し、第5章は株式会社イビソクが執筆し、編集は奈良が行った。
10. 発掘調査の出土遺物や写真・図面等の記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
11. 発掘調査・遺物整理にあたっては、以下の方々よりご指導・ご教示・ご協力いただいた。
藤井寺市教育委員会、大阪府都市整備部（順不同）
12. 発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。

凡例

1. 本書で用いる座標値は世界測地系（国土地理座標第Ⅵ系）に基づき、方位針は座標北を示す。水準値は T.P. 値（東京湾平均海面）を用い、本文および挿図中では T.P. + ○m と表記する。
2. 遺構番号は、遺構の種類に関係なく、検出した順に 3 桁の数値で付している。遺構番号→遺構名とし、建物跡や柱列等の複数遺構の集合体によるものについては、遺構の種類→遺構番号の順に番号を付した。各番号は発掘調査での記録と合致する。また、掲載遺物に付した番号は通し番号で、挿図と図版の番号は一致している。
3. 地層および遺物の色調については、『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄/2021 年度版）に拠る。
4. 遺物実測図の断面は、縄文土器・須恵器・陶器・磁器を黒塗り、瓦器を網伏せとし、その他を白抜きとした。
5. 引用・参考文献は、第 5 章については章末に記し、その他は巻末に一括した。

目次

序文	
例言	
凡例	
第1章 調査にいたる経緯・経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過と方法	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査成果	9
第1節 基本層序	9
第2節 検出した遺構	10
第4章 出土遺物	31
第1節 遺構出土遺物	31
第5章 自然科学分析	45
第1節 太田遺跡出土柱材の樹種同定	45
第6章 総括	47
第1節 平安時代後期～鎌倉時代前期の集落の様相	47
観察表	49
報告書抄録	

挿図目次

図1 調査地位置図	1	図17 柱穴断面図(2)	20
図2 調査区地区割図	2	図18 柱穴断面図(3)	21
図3 地形分類と古墳時代の主要な古墳・集落遺跡	4	図19 006・007・039・080・091・120・126・	
図4 周辺遺跡地図	5	137土坑平面・断面図	22
図5 既往の調査区	6	図20 102土坑平面・断面図	23
図6 北壁断面図	9	図21 地震による地層の変形平面・断面図	24
図7 212流路平面・断面図	10	図22 005・094溝平面・断面図	25
図8 平安時代後期～鎌倉時代前期遺構平面図	11	図23 157・183・188・189・190溝平面図・119・	
図9 掘立柱建物1平面・断面図	12	157断面図	26
図10 掘立柱建物2平面・断面図	13	図24 101・190溝断面図	27
図11 掘立柱建物3平面・断面図	14	図25 近世以降遺構平面図	29
図12 掘立柱建物4平面・断面図	15	図26 近世以降遺構断面図	30
図13 柱列1・2平面・断面図	16	図27 掘立柱建物2・4・6・024・070・079柱穴・	
図14 掘立柱建物5平面・断面図	17	135溝出土遺物	31
図15 掘立柱建物6・135溝平面・断面図	18	図28 073・021柱穴出土柱材	32
図16 柱穴断面図(1)	19	図29 102土坑・005・094・132溝出土遺物	32

図 30	101 溝出土遺物 (1).....	33	図 37	119 上層・下層出土遺物.....	40
図 31	101 溝出土遺物 (2).....	34	図 38	119 出土遺物.....	41
図 32	101 溝出土遺物 (3).....	35	図 39	157・183・188・189・190 溝出土遺物.....	43
図 33	101 溝出土遺物 (4).....	36	図 40	127 土坑・158 溝・159 土坑出土遺物・表探遺物.....	44
図 34	101 溝出土遺物 (5).....	37	図 41	太田遺跡出土柱材の光学顕微鏡写真.....	46
図 35	101 溝出土遺物 (6).....	38	図 42	調査地周辺における平安時代後期から鎌倉時代 前期にかけての遺構平面図.....	48
図 36	101 溝出土遺物 (7).....	39			

表目次

表 1	既往の調査歴.....	7	表 2	太田遺跡出土柱材の樹種同定結果.....	45
-----	-------------	---	-----	----------------------	----

図版目次

図版 1	調査区地層断面	図版 12	101 溝出土遺物 (1)
図版 2	平安時代以前 流路・平安時代後期から鎌 倉時代前期 掘立柱建物 (1)	図版 13	101 溝出土遺物 (2)
図版 3	平安時代後期から鎌倉時代前期 掘立柱建物 (2)	図版 14	101 溝出土遺物 (3)
図版 4	平安時代後期から鎌倉時代前期 掘立柱建物 (3)	図版 15	101 溝出土遺物 (4)
図版 5	平安時代後期から鎌倉時代前期 掘立柱建 物 (4)・溝	図版 16	101 溝出土遺物 (5)
図版 6	平安時代後期から鎌倉時代前期 柱穴・土坑	図版 17	101 溝出土遺物 (6)
図版 7	平安時代後期から鎌倉時代前期 土坑	図版 18	101 溝出土遺物 (7)
図版 8	平安時代後期から鎌倉時代前期 土坑状変形・溝	図版 19	119 上層・下層・119 出土遺物 (1)
図版 9	平安時代後期から鎌倉時代前期 溝	図版 20	119 上層・下層・119 出土遺物 (2)
図版 10	近世以降 土坑	図版 21	127 土坑・157・189 溝出土遺物
図版 11	102 土坑・135 溝・掘立柱建物 2・4・6 ・柱穴・005・094・156・188 溝出土遺物	図版 22	132・183・190 溝・掘立柱建物 2・4 出土遺物

第1章 調査にいたる経緯・経過

第1節 調査の経緯

本調査は、一般府道大阪湾曳野線（八尾富田林線）事業に伴うものである（図1）。

令和2年度に埋蔵文化財包蔵地での開発事業に対する取扱いについて、富田林土木事務所松原建設事業所建設課と教育庁文化財保護課は協議を重ね、大阪府より令和2年5月に文化財保護法第94条第1項の通知が提出されるとともに、令和2年6月に確認調査を実施した。

確認調査の結果、遺構・遺物を検出したことから記録保存調査が必要と判断し、令和2年12月から令和3年7月までと令和6年1月から令和6年5月までの期間、発掘調査を実施した。

また、発掘調査に係わる遺物整理・報告書作成業務は、令和3年8月から令和7年3月まで行った。

第2節 調査の経過と方法

調査区分

地区割りについては、世界測地系に則った平面直角座標系第Ⅵ系を基準とし、Ⅰ～Ⅳの大小4段階の区画を設定した（図2）。遺物の取り上げについては、この地区割りをを用い10m区画ごとに行った。

発掘作業

令和2年12月から令和3年7月と令和6年1月から令和6年5月にかけて発掘調査を実施した。

調査はまず重機によって盛土、近代及び近世の耕作土を除去した。それ以下の地層をスコップや鋤簾などを使用し人力によって掘削した。掘削した土はベルトコンベヤーによって調査区外へと搬出した。遺構の検出及び掘削は主に草刈り及び移植ゴテを使用した。

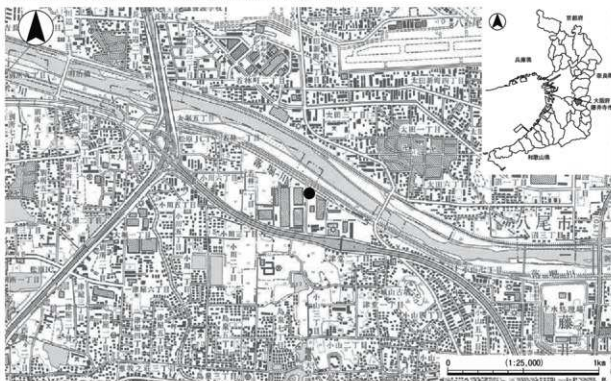


図1 調査地位図（国土院発行25万分1地形図に●調査地点を追記して掲載）

確認調査の成果から第4層上面で遺構を検出する計画をもって調査に臨んだ。

20018・21001の遺構全体の平面測量は、無人航空機による空中写真測量を行い50分の1の平面図を作成した。また、23032・24003の遺構全体の平面測量はトータルステーションにより、20分の1の平面図を作成した。それとは別に、地層の堆積状況を示す断面図や各遺構の詳細断面図をエスロンテープやメジャーを用いて作成した。遺構図面はすべて世界測地系に準拠して作成している。方位は座標北を使用し、水準は東京湾平均海面（T.P.）を用いた。

写真撮影

遺跡の全体を撮影するため高所作業車を利用して全景写真を撮影するとともに個別の遺構に対して半載した後、堆積状況の観察や堆積構造を分析ための断面写真を撮影した。写真撮影はデジタルカメラ（フルサイズセンサー）を使用して撮影を行った。

自然科学分析

021・073柱穴より柱材が出土したことから、樹種同定を行った。

整理等作業

報告書の作成は令和3年8月から実施した。現地で記録した図面・写真の整理を行うとともに、遺物の洗浄・復元、実測を行った。遺物の量はプラスチックコンテナ26箱分であった。

遺物実測図は、スキャナで原図を取り込みデジタルトレースし挿図を作成した。遺物実測及びデジタルトレース作業の一部は委託により実施した。

遺構図面のうち平面図については、空中写真測量により全体図がデジタル化されていたため、必要な箇所を拡大・加工し遺構平面図を作成した。遺構断面図及び調査区壁断面図については、遺物と同様の手順にて挿図を作成した。

現地で撮影した写真に関しては、デジタルプリントを行いファイルに収納した。また、報告書に掲載する遺物については、委託によって写真撮影した。

以上の作業と併行して報告文を作成し、報告書の編集作業を行った。

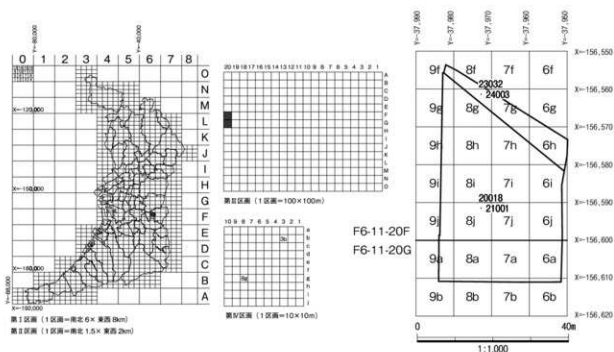


図2 調査区地区割図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

太田遺跡は、八尾市太田新町一・二・三丁目、太田三・四・九丁目、藤井寺市津堂四丁目に所在する。河内低地に位置しており、現在の標高は15～16mを測る（図3）。

太田遺跡は河内台地を下刻する谷の内部に位置しており、南に位置する津堂遺跡では大阪府教育委員会が調査した地点において古墳時代中期に埋没する流路を検出している（岩崎二郎編1992）。大和川より北の八尾市側の太田遺跡では、これより古い氾濫堆積物が確認されており、付近は南北の支谷があったと考えられる（井上・大庭2020）。津堂遺跡では古墳時代中期に埋没する北西に流れる支流も確認しており、古墳時代中期には氾濫原となっていたと考えられる。人々は谷の斜面や氾濫原内にできた自然堤防上に生活を営んでいた。今回の調査において平安時代までの蛇行する流路を検出しており、付近を河川が流れていたものと考えられる。

現在、付近一帯はほぼ平坦な土地となっており近代までは水田として利用されてきたが、昭和時代以降は西名阪自動車道が建設され、付近に工場や宅地が造成され、水田は一部の地域に限定され残存している。

第2節 歴史的環境

ここでは、これまで現大和川以南で実施された太田遺跡の調査成果で、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての成果およびこれに関わる津堂遺跡、塔ノ本廃寺の調査成果について概観する（図4）。既往の調査歴については、図5・表1のとおりである。

11世紀後半から12世紀前半

府821の調査において、11世紀後葉から12世紀前葉にかけての掘立柱建物を多数検出している。トレンチ調査であるため、棟数は不明である。また、集落内では「康和四年四月廿三日守丸」と記された井戸枠の曲げ物に転用された縦板が出土している。康和四年は1102年であり、この時期の集落が広がっていたことが裏付けられる。

TD2014-3においては、広範な調査から居住域が5つ検出されている。存続時期の長い居住域もあるが、最盛期は11世紀後半から12世紀前半である。L字形の大溝は、12世紀から13世紀初頭まで存続したようで、坪境溝として12世紀には土地区画が成立していたことがわかる。

府21017では12世紀前半の掘立柱建物を3棟検出している。復元できたのは3棟であるが他にも多数の柱穴を検出しており、本来はもっと多くの建物が建っていたと考えられる。掘立柱建物の1棟は四面庇に復元でき、大型の掘立柱建物である。

12世紀後半から13世紀初頭

XNS-1では現在の西水川の前身となる自然流路とOOT91-1においては西水川に並行する溝が検出されている。この西水川の東西において集落が検出されている。

西水川西側の府82-1では、北西隅において12世紀半ばから後半にかけての土坑と南側において12世紀半ばの掘立柱建物を検出しており、TD2014-3では居住域の1つが12世紀末まで存続していた。いずれも前代に比べ集落規模は縮小していると考えられる。西側の集落については、これ以降人の活動が衰退傾向となり、西水川東側の集落が中心となっていく。

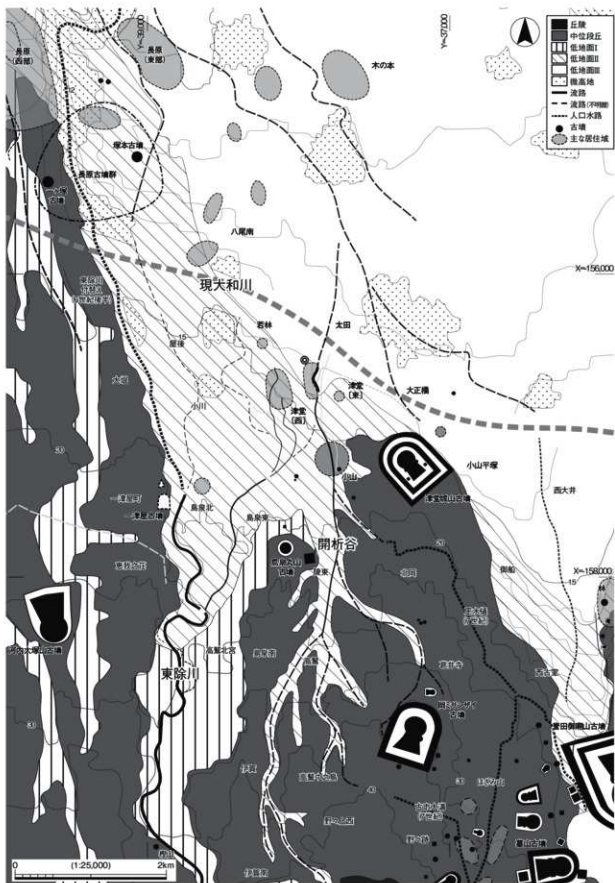


図3 地形分類と古墳時代の主要な古墳・集落遺跡（笹栗 2020 に○調査地点を追記して掲載）



図4 周辺遺跡地図 (国土地理院発行5万分1地形図に大阪府地図情報提供システムの埋蔵文化財包蔵地を加筆)

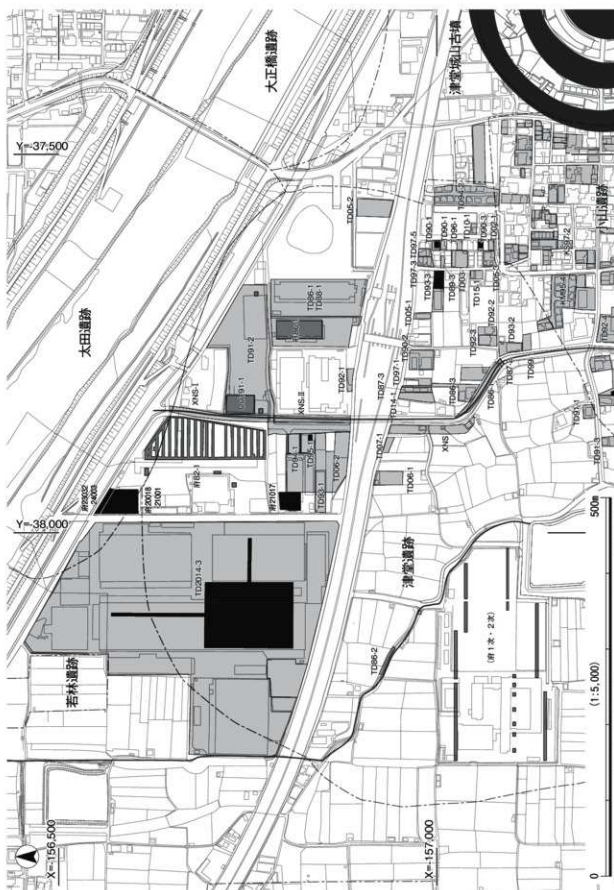


図5 既往の調査区（笹栗編2016に府調査を追記）

表1 既往の調査歴

調査組織	調査名	調査期間	所在地	面積(m ²)	主な遺構	主な遺物	報告書
府教委	(府1次)	1973/5/17～23前後	津安3丁目51613 か	約2,000	弥生～平安、溝や住居跡など		-
府教委	(府2次)	1974/2/4～3/8	(藤井寺高校用地内)	約500	弥生～平安?、大溝、土坑	土師器・須恵器・瓦器ほか	府1
府教委	82-1	1982/12/20～ 1983/3/31	津安4丁目、太田 9丁目	約8,000	4c後半～5c河川、溝、井戸、土坑 11～13c掘立柱建物、井戸、溝	土師器・須恵器 土師器・須恵器・瓦器ほか	府4
市教委	XNS-I	1983/3/8～16	津安4丁目	60	12c溝	瓦器	年報57年度
市教委	XNS-II	1983/11/1～12/17	津安4丁目	392	6c自然流路 13c掘立柱建物		年報58年度
市教委	XNS	1985/10/16～12/20	津安3丁目	(350)			年報60年度
府教委	86-1	1986/4/15～11/5	津安2丁目	4,807	5c大土坑、井戸、土坑、溝 12～13c掘立柱建物、井戸、土坑、溝、 溝列	縄文土器(晩期)、弥生土器、 庄内式土器 土師器・須恵器・石製品 瓦器・土師器・瓦器(梵字瓦)	府2・3
市教委	TD86-1	1986/11/20～ 1987/3/28	津安2丁目	(8,391)	古墳時代土坑、溝 中世大溝、建物、井戸など		石川Ⅱ
市教委	TD86-2	1986/12/16～22	津安3丁目	(84)	中世自然流路		石川Ⅱ
市教委	TD86-3	1987/1/13	津安2丁目100-1 津安3丁目101-1 の一部	(457)	尼蔵庫か		石川Ⅱ
市教委	TD86-4	1987/3/16～30	津安2丁目	350	中世～古代の自然河川	埴輪・須恵器(河川下層)	石川Ⅱ
市教委	TD87-1	1987/3/28	津安3丁目	1.5×3		須恵器、瓦器	石川Ⅱ
市教委	TD87-2	1987/5/11～19	津安3丁目	15×2	自然河川	12c瓦器、6～7c土器・瓦(志 多文軒丸)	石川Ⅱ・ Ⅲ1
市教委	TD87-3	1988/1/11～13	津安2丁目131	(240)	6c自然流路	円筒埴輪、須恵器、土師器	石川Ⅱ
市教委	TD88-1	1988/3/28～	津安2丁目72-1	(8,391)	13c居間か		石川Ⅲ・ Ⅳ5
市教委	TD89-1	1989/9/21～30	津安4丁目494-1	42+39			石川Ⅴ
市教委	TD89-2	1990/2/1～12	津安2丁目105-1	(80)	遺構なし、付近に自然流路か	中世	石川Ⅴ
市教委	TD89-3	1990/2/2～5	津安2丁目51-3	(495)	なし	なし	石川Ⅴ
市教委	TD90-1	1991/4/12	津安3丁目129-8	(105)	周辺に古墳か	人物埴輪(V期)	石川Ⅴ
市教委	TD90-2	1991/10/25～11/7、 11/26～28	津安2丁目105-1	(669)	近世溝		石川Ⅵ
市教委	TD90-3	1991/12/3	津安2丁目51-3	(105)	古墳跡土か	なし	石川Ⅵ
市教委	TD91-1	1991/9/12	津安3丁目129-8	2		須恵器・土師器	石川Ⅵ
市教委	TD91-2	1991/10/28、12/17 ～1992/1/22	津安2丁目732-2 他	150	中世掘立柱建物・溝		石川Ⅵ
市教委	TD91-3	1991/11/13	小山1丁目143-4	2			石川Ⅵ
八文研	OOT91-1	1992/1/28～3/23	太田9丁目	1,000	5c遺構 12～13c井戸、土坑、溝 12c後半前後、掘立柱建物 古墳時代土坑・溝	5c土師器・須恵器 12～13c瓦器・土師器・梵字瓦	Ⅷ1
市教委	TD92-1	1992/4/16～6/3	津安2丁目128	335			石川Ⅶ
市教委	TD92-2	1992/4/23	津安2丁目57の一部	2			石川Ⅶ
市教委	TD92-3	1992/4/23	津安2丁目57の一部	2	奉道橋面未到達		石川Ⅶ
市教委	TD92-4	1992/4/27	小山3丁目579- 4580-4581-2	2		埴輪、サモサイト	石川Ⅶ
市教委	TD93-1	1994/1/18	津安1丁目321-1	(812)	発本調査なし		石川Ⅷ
市教委	TD93-2	1994/1/27～28	津安2丁目591-1、 110-4	(420)		土師器少量	石川Ⅷ
市教委	TD93-3	1994/1/24～31	津安2丁目531	(797)	6c末 南北方向の溝 古墳時代前期土坑、ピット(約100)		石川Ⅷ
市教委	TD94-1	1994/9/27～10/6	津安4丁目319-2	29.4 + 35.7	中世南北方向溝	銅片	石川Ⅸ
市教委	TD94-2	1994/10/21～24、 11/10～29	津安2丁目301	(1,653)	弥生溝 古墳～奈良溝	弥生土器器(Ⅳ) 土師器・須恵器(6～8c) 円筒埴輪Ⅴ	石川Ⅸ
市教委	TD95-1	1996/10/17	津安2丁目51-9	2	中世溝か	土師器銅片	石川Ⅹ
市教委	TD96-1	1996/10/17	津安2丁目106-6 の一部	4		埴輪	石川13
市教委	TD97-1	1997/7/29	津安2丁目51-6	2	奉地山未確認	土師器	石川13
市教委	TD97-2	1998/2/2	津安2丁目22-2の一部	2	奉地山未確認		石川14
市教委	TD97-3	1998/3/6	津安2丁目22-2の一部	1	奉地山未確認		石川14
市教委	TD99-1	1999/11/17	津安2丁目590-5	12	中世溝	土師器・須恵器	石川16
市教委	TD00-1	2003/2/25	津安2丁目51-15	2		古代土師器	石川19
市教委	TD00-2	2003/10/2	津安2丁目52-1	4	奉地山未確認		石川20
市教委	TD05-1	2005/11/11	津安2丁目64-564- 7	3		古代土師器・須恵器	石川22
市教委	TD05-2	2006/1/13/	津安2丁目28-1	8	奉地山未確認		石川22
市教委	TD05-3	2006/3/13	津安2丁目53-1	2	奉地山未確認		石川22

第2章 遺跡の位置と環境

調査組織	調査名	調査期間	所在地	面積 (㎡)	主な遺構	主な遺物	報告書
市教委	TD06-1	2006/11/13	津堂3丁目 286.5	8	古代溝	土師器・須恵器	石川 23
市教委	TD06-2	2007/3/13	津堂4丁目 317・1318, 320, 321 地	16	古代溝	土師器・須恵器	石川 23
市教委	TD07-1	2007/4/3	津堂3丁目 279-1の一部	2	古代溝込み	土師器	石川 23
市教委	TD10-1	2010/12/15	津堂2丁目 50・2・51-4の一部	1	幸地山未確認	古代土師器	石川 27
市教委	TD14-1	2014/7/16	津堂2丁目 101-1の一部	5			石川 30
市教委・大文セ	TD14-3	2015/5/11～9/30	津堂4丁目 435, 464, 302-1	9811	古墳前・中期集落（大型建物・道路など） 古墳後期～奈良（遺構用溝群） 平安～中世（建物・井戸・溝など）	縄文土師・弥生土師・石器・土師器・須恵器・石製品・瓦・埴輪陶器・黒色土師・瓦器・瓦質土師・磁器	藤 39/ 大文セ 273
市教委	21017・22001	2021/8/18～ 2022/6/29	津堂4丁目	717	古墳前・中期（倉庫群・横列・井戸・土坑） 平安～中世（建物・溝・土坑・井戸）	土師器・須恵器・瓦器・磁器	府 6

※調査面積の（ ）は開発面積 [図5：グレーの範囲]、（ ）なしは調査面積 [図5：黒色・濃灰色部分調査区]

【調査組織】市教委：大阪府教育委員会、市教委：藤井寺市教育委員会、八文研：（財）八尾市文化財調査研究会、大文セ：（公財）大阪府文化財センター（いずれも調査時の名称）

【報告書】年報○：藤井寺市教育委員会発行『文化財保護年報』各巻（昭和57～62年度）

石川○：藤井寺市教育委員会発行『石川流域遺跡群発掘調査報告』各巻

市1：上田陸 1987『藤井寺市及びその周辺の古代寺院（下）』藤井寺の遺跡ガイドブック No.3

府1：田代克己・瀬川健 1974『津堂遺跡発掘調査概要』大阪府文化財調査概要 1973 大阪府教育委員会

府2：一瀬和夫 1987『津堂遺跡－86-1区の調査－』大阪府教育委員会

府3：一瀬和夫ほか 1988『Ⅲ．津堂遺跡の調査』『南河内遺跡群発掘調査概要・1』大阪府教育委員会

府4：岩崎二郎編 1992『津堂遺跡』大阪府文化財調査報告書 第43輯 大阪府教育委員会

府5：山田幸弘編 2004『南河内における中世城館の調査』大阪府教育委員会

府6：原田昌浩編 2024『津堂遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2023-5 大阪府教育委員会

八1：原田昌浩 2008『太田遺跡第1次発掘調査報告書』（財）八尾市文化財調査研究会報告 108

藤 39/大文セ 273：笹栗拓編 2016『津堂遺跡－TD2014-3区の発掘調査報告書－』藤井寺市文化財報告 第39集、（公財）大阪府文化財センター調査報告書 第273集

東側のOOT91-1においては、12世紀後半の掘立柱建物と井戸を多数検出している。その一つに塔ノ本廃寺に関連する屋瓦類を井戸枠として利用した井戸がある。集落内寺院として指摘されている塔ノ本廃寺については不明な点が多いが、瓦を井戸枠とした井戸は12世紀末に埋没していることから、この頃には既に廃絶し転用されていたと考えられる。

TD86-1では、12世紀後半の区画溝が検出されており、東側においても条里区画に沿った開発が実施されていたことが窺われる。また、府86-1でも多くの遺構を検出しており、周辺が集落の中心であったと考えられる。

13世紀前半から13世紀後半

府86-1およびTD86-1で四方が溝で区画され、その内部に掘立柱建物群を配する集落が認められる。さらに、府86-1では北東西側に「コ」の字形に溝を設け、南側に欄列で区画された東西約17m、南北約16mの範囲に、掘立柱建物を配する13世紀前半の方形居館を検出している。小字が「殿本」であることから荘園領主の館であった可能性が指摘されている（原田 2008）。

太田遺跡および津堂遺跡では11世紀半ばから集落が形成され、13世紀にかけて集落域が拡大している。また、西水川の西側は11世紀後半から12世紀半ば、東側は12世紀後半から13世紀に盛行しており、西と東で集落の消長時期が異なっている。14世紀になると付近一帯に集落は認められず、耕作地へと変貌したと考えられる。

第3章 調査成果

第1節 基本層序

20018 調査区の北壁を基本層序として述べる（図6）。

- 第1層** 現代の作土層である。層厚は約20cmを測る。
- 第2層** 近世の作土層である。下面において荷重痕が認められる。
- 第3層** 中世から近世の作土層である。全面ではなくX=156,585より北側で確認した。
- 第4層** シルト～砂である。層厚は約30cmを測る。中世の盛土である。上面には柱穴や溝を検出しており、集落が広がっていた。層内に遺物は含まれていないが、検出した遺構からは11世紀後半から13世紀前半までの遺物が出土している。
- 第5層** 自然堆積層である。氾濫原堆積物である。a～eの5層に細別できる。各層位からは遺物が出土しておらず詳細な時期は不明である。平安時代までの堆積である。
- 第6層** 自然堆積層である。a・bの2層に細別できる。a層は古土壌で、b層はその母材である。
- 第7層** 自然堆積層である。a～eの5層に細別できる。地震による変形構造が認められる。
- 第8層** 自然堆積層である。層厚は約20cmを測る。
- 第9層** 自然堆積層である。層厚は約10～20cmを測る。古土壌である。
- 第10層** 自然堆積層である。

今回の調査では、第4層上面と第4層下面において遺構を検出した。

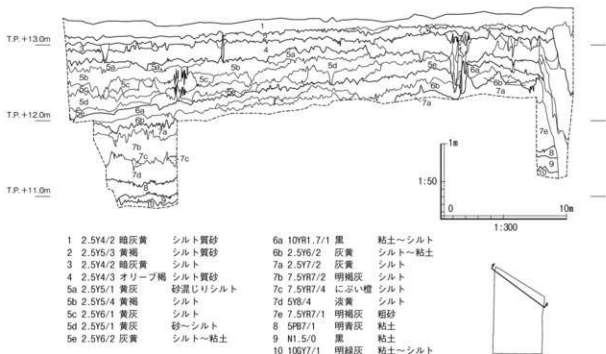


図6 北壁断面図

第2節 検出した遺構

出土遺物や遺構埋土の検討結果から導き出された時代に順じて遺構の詳細な記述を行う。

第1項 平安時代以前

212 流路 (図7)

調査区の南東において、南から北に流れる自然流路を検出した。T.P.+11.6 mまで調査を行なったが、

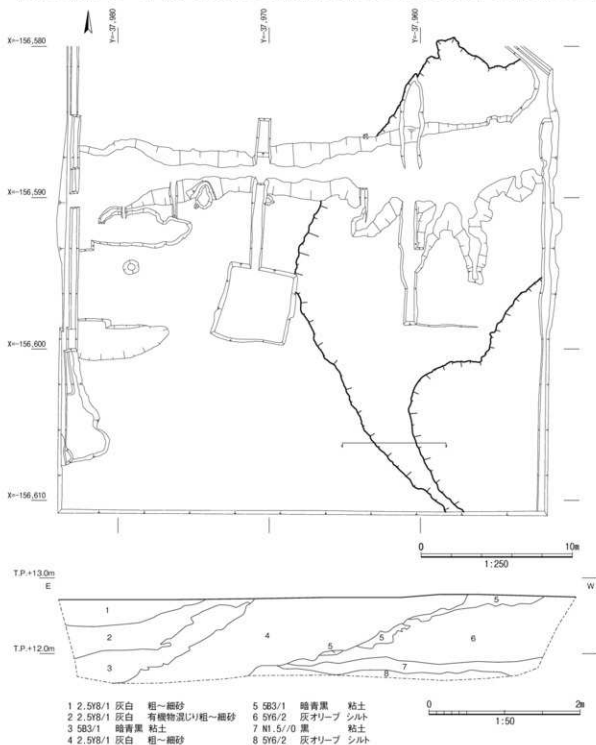


図7 212 流路平面・断面図

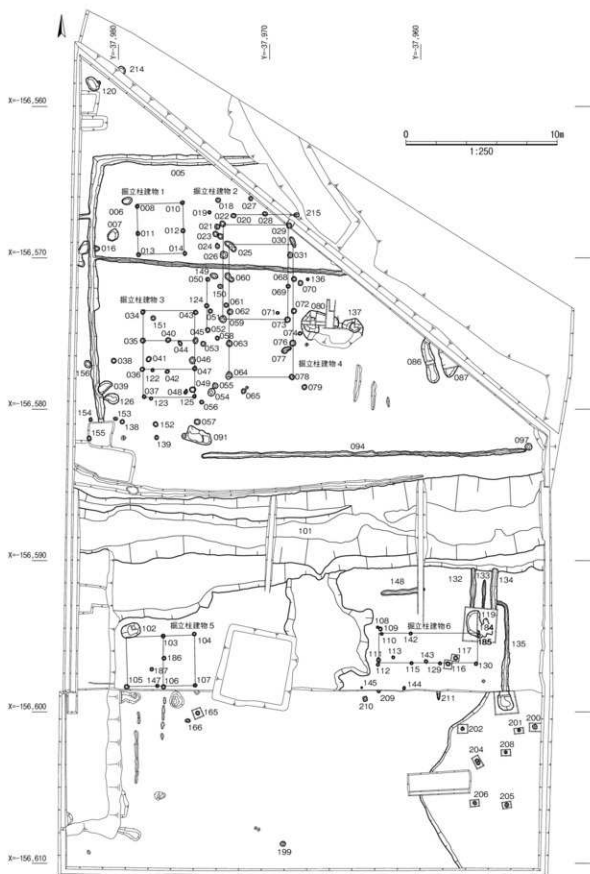


図8 平安時代後期～鎌倉時代前期遺構平面図

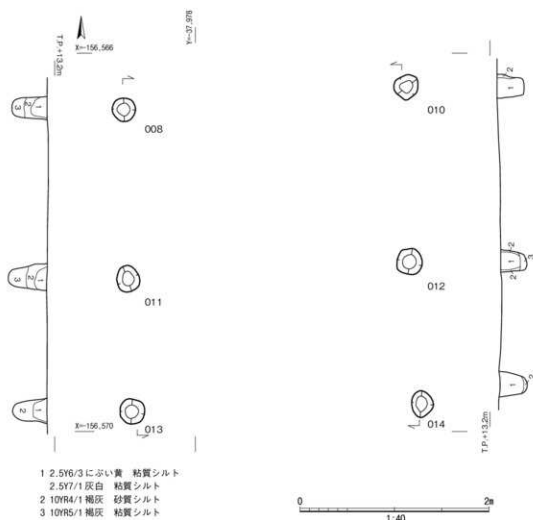


図9 掘立柱建物1平面・断面図

流路底はさらに深くなるため調査はこの高さまでとした。西から東へと側方移動している。遺物が出土しておらず明確な時期については判断できないが、平安時代までには埋没していたと考えられる。

第2項 平安時代後期から鎌倉時代前期 (図8)

1. 掘立柱建物

掘立柱建物1 (図9)

008・010～014柱穴で構成される1間×2間の掘立柱建物である。軸はN-3°-Wにおく。柱穴の中心間において梁行は3m、桁行は3.2～3.3mを測る。面積は約10㎡である。

掘立柱建物2 (図10)

022・026・150・059・029・031・069・073柱穴で構成される掘立柱建物である。1間×3間の掘立柱建物である。軸はN-1°-Eにおく。柱穴の中心間において梁行は4.2m、桁行は6.3mを測る。面積は約26㎡である。073柱穴では柱材が残存していた。材はヒノキであった(第5章参照)。また、12世紀後半の瓦器(1・2)、土師器皿(3)と土師質土器羽釜(5)が出土した。029柱穴の底には土師質土器羽釜の破片(6)が底に設置されていた。掘立柱建物の所属時期は12世紀後半と考える。

掘立柱建物3 (図11)

034～037・040・042・043・045・047・125柱穴で構成される1間×3間の掘立柱建物である。040・

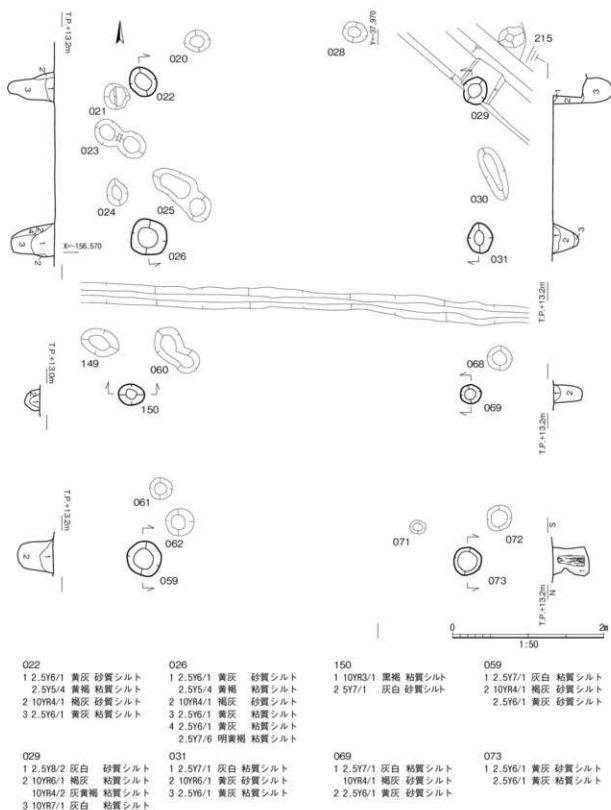


図10 掘立柱建物2平面・断面図

042 柱穴は棟持柱と考えられる。軸はほぼ真北を向く。柱穴の中心間において梁行は3.4 m、桁行は5.6 mを測る。面積は約19㎡である。

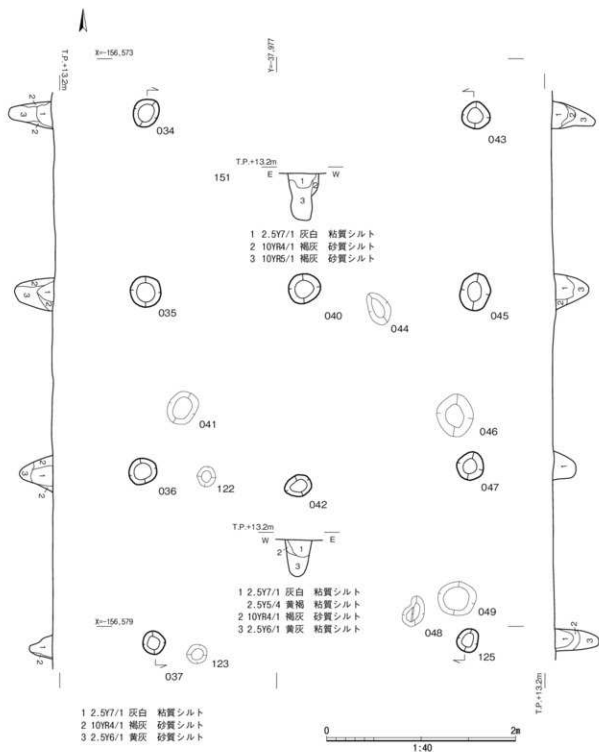


図 11 掘立柱建物 3 平面・断面図

掘立柱建物 4 (図 12)

025・030・060・062～064・068・072・076・078 柱穴で構成される 1 間×4 間の掘立柱建物である。軸はほぼ真北を向く。柱穴の中心間において奥行は 4.2m、桁行は 8.7m を測る。面積は約 37m²である。025・030 柱穴は柱を据え替えているようで、底の柱当りを 2 か所検出している。062・072 柱穴では柱材の一部が残存していた。025 柱穴からは 11 世紀後半、030 柱穴からは 12 世紀後半、076 柱穴からは 12 世紀前半の遺物が出土した。時期としては 12 世紀後半と考える。なお、掘立柱建物 4 では附随する

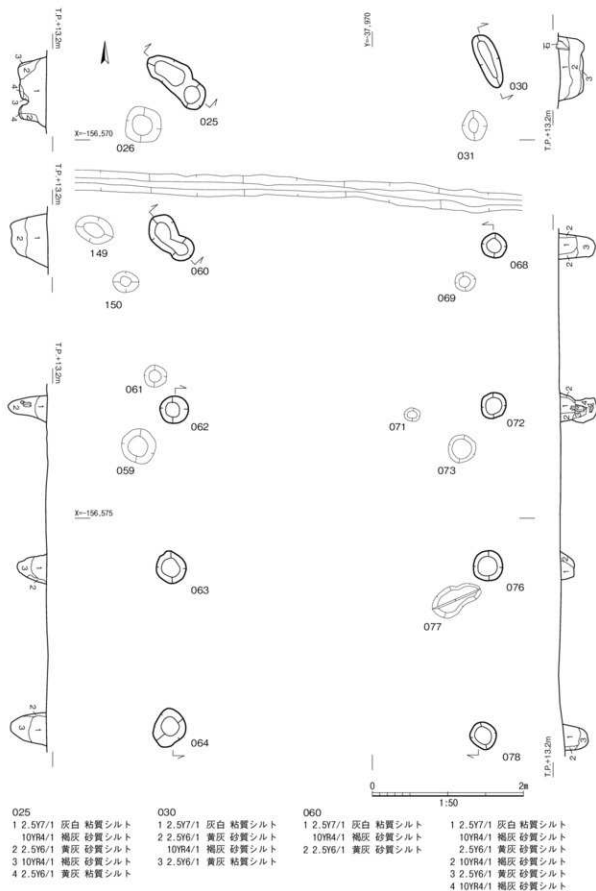


図12 掘立柱建物4平面・断面図

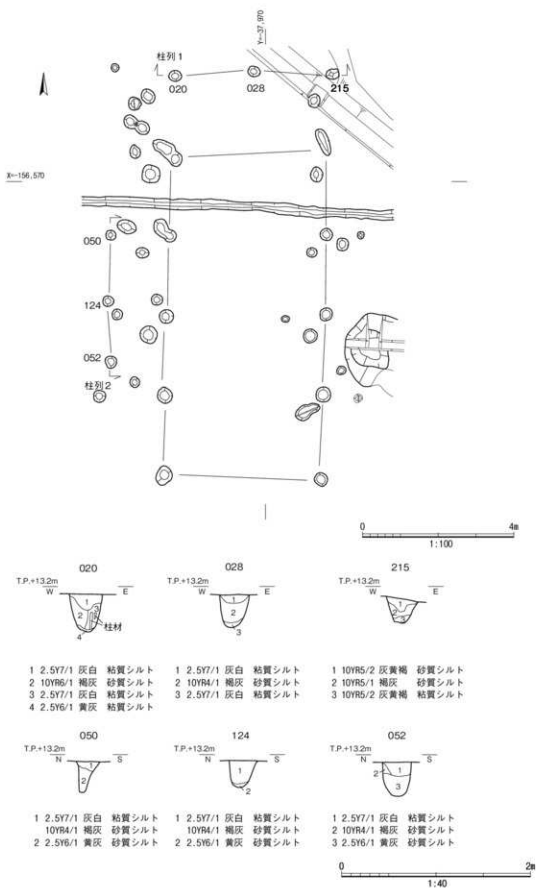


図13 柱列1・2平面・断面図

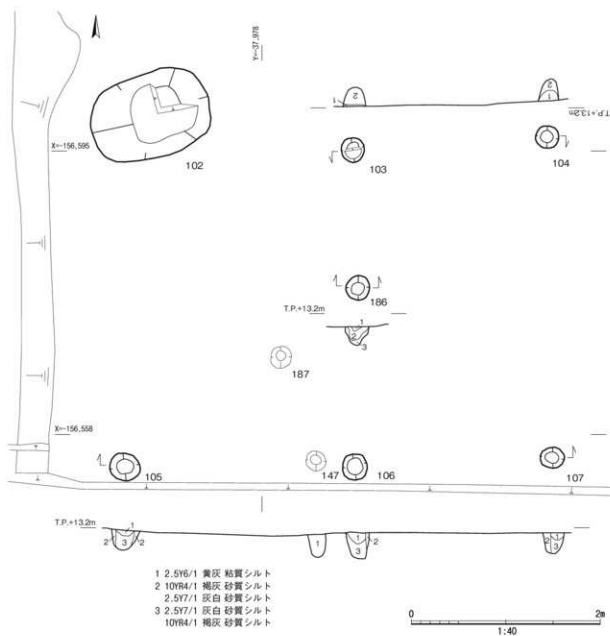


図14 掘立柱建物5平面・断面図

施設と考えられる柱列1・2を検出したのでここで報告する。

柱列1 (図13)

020・028・215 柱穴で構成される柱列である。それぞれの柱間は柱穴の中心間において2.1mを測る。

柱列2 (図13)

050・124・052 柱穴で構成される柱列である。050と124の柱間は柱穴の中心間において1.7m、124と052は1.6mを測る。

掘立柱建物5 (図14)

103～107・186 柱穴で構成される1間×2間の掘立柱建物である。軸はN-1°-Eにおく。柱穴の中心間において梁行は約3.4m、桁行は4.5mを測る。面積は約15m²である。北西隅の柱部分には102土坑が掘削されており、本来はこの部分に柱穴があったと推測する。時期を示す遺物は出土していないが102土坑からは11世紀後半の土器が出土しており、これより古い年代となる。

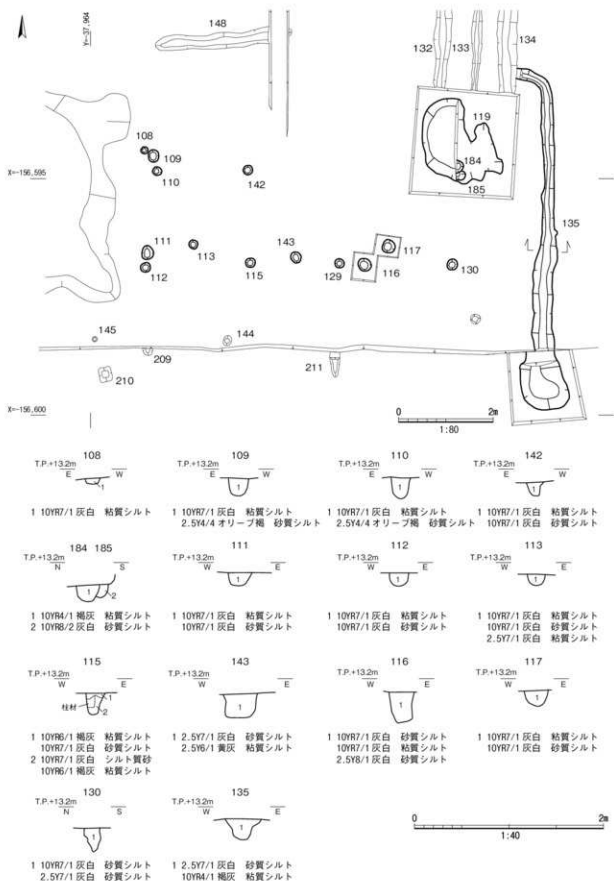


図 15 掘立柱建物 6・135 溝平面・断面図

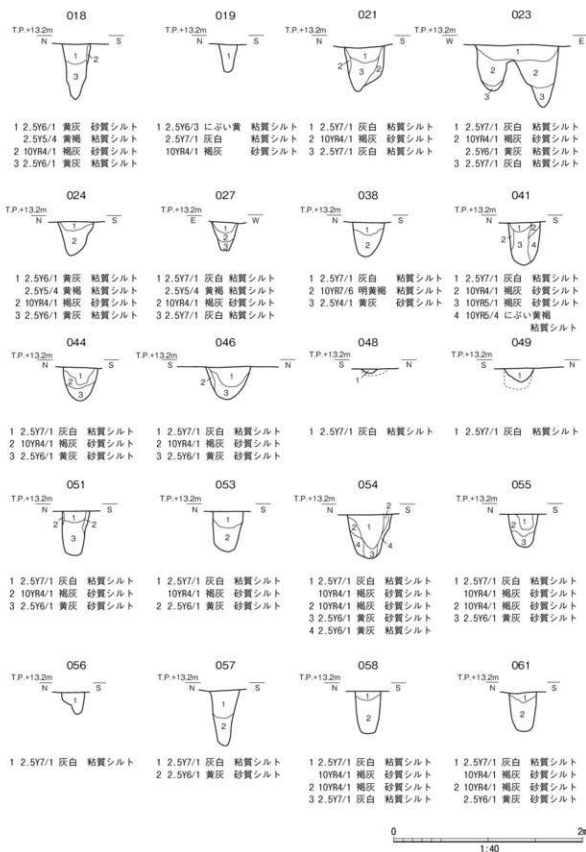


図16 柱穴断面図(1)

第3章 調査成果

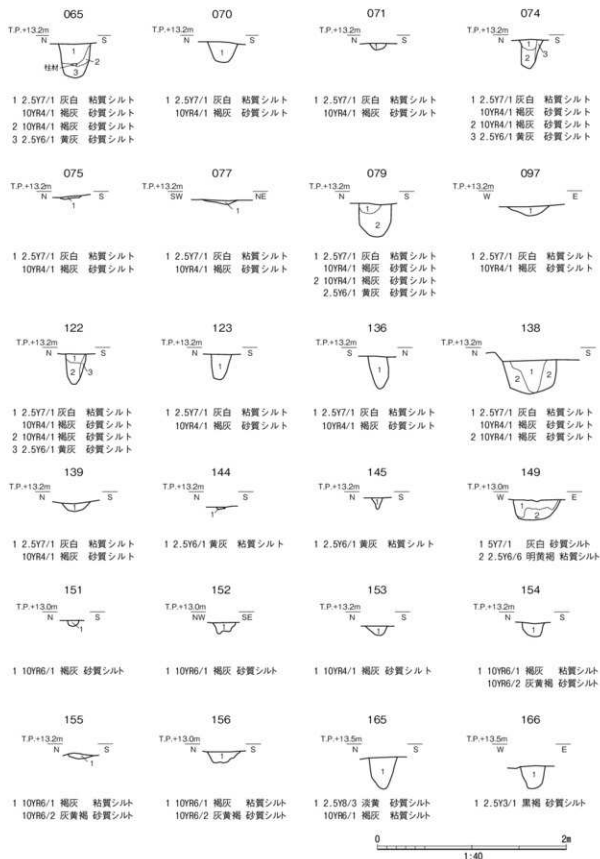


図17 柱穴断面図 (2)

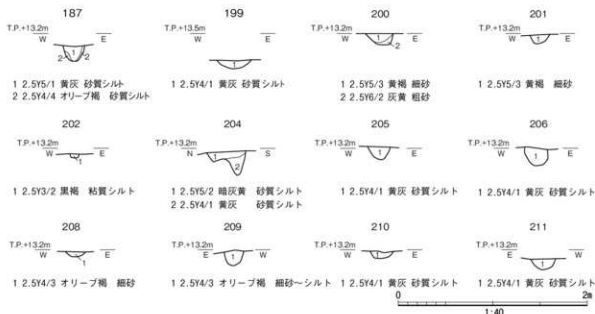


図18 柱穴断面図(3)

掘立柱建物6 (図15)

110・142・185・112・115・116・130柱穴で構成される1間×3間の掘立柱建物である。軸はN-2°-Eにおく。柱穴の中心間において梁行は1.9m、桁行は6.4mを測る。面積は約12㎡である。116柱穴の対となる北側の柱穴については、検出できなかった。185柱穴は184柱穴と切り合い関係が認められることから建替えがあったと考えられる。109・112・117・129柱穴はこの建替えに伴う柱穴である。116柱穴からは12世紀前半の遺物(12・13)が出土した。

掘立柱建物6の東側には附随する135溝を検出したのでここで記載する。

135 溝 (図15)

掘立柱建物6の北東側を囲むL字に曲がる溝を検出した。幅0.4m、深さ0.2mを測る。ただ、後世の鋤溝により西側延長部分については判然としない。また、当初は148溝が関連する遺構と考えていたが、西側の延長線上に当たらないことから関係はないと判断した。埋土の中からは12世紀前半の瓦器(16～19)が出土した。

2. 柱穴 (図16～18)

掘立柱建物などを構成する柱穴を多数検出した。対応関係が不明であるためここに一括して掲載する。

021・065柱穴

柱材が残存している柱穴である。021柱穴の柱材は樹種はコウヤマキであった(第5章参照)。

018・041・051・054・074・065・122・138・187柱穴

柱穴の周囲に別の土が入り込む柱穴である。柱が腐朽により細くなり空間が空いたため周囲の土が入り込んだのか、柱を固定するための土と考えられる。021・065柱穴も同様の堆積がみられる。最終的には窪地となり埋め戻しにより埋没している。

023・024・027・038・044・053・055・057・058・061・079・149・150・186・200・203柱穴

埋土が上下2または3層に分かれる柱穴である。柱を抜いて窪地となった部分に埋め戻した土と整地に伴う盛土が堆積したと考えられる。024・079柱穴からは11世紀後半の土師器皿(21・23)が出土した。

その他の柱穴は1層の埋土である。いずれも偽罫が混ざっており埋め戻した層と考えられる。また、211は柱穴ではなく鋤溝の可能性もある。

第3章 調査成果

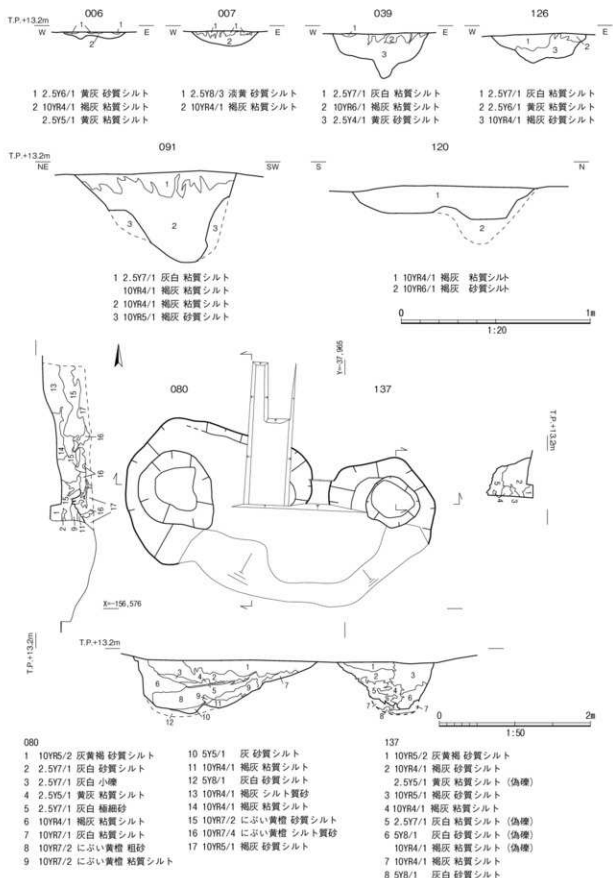


図 19 006・007・039・080・091・120・126・137 土坑平面・断面図

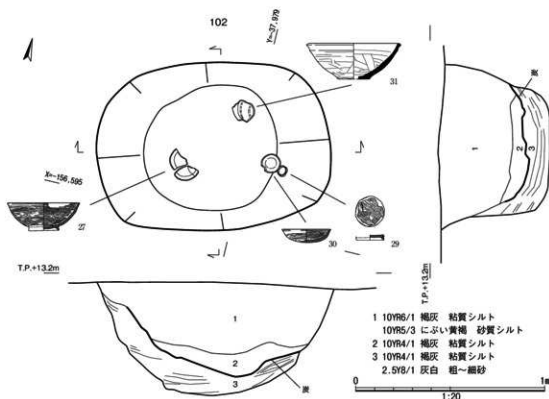


図20 102土坑平面・断面図

3. 土坑

006・007土坑 (図19)

直径約0.7m、深さ0.1mを測る不定形の土坑である。黄灰色砂質シルトが褐灰色粘質シルトに沈み込む荷重痕が認められる。黄灰色砂質シルトは近世の耕作土であることから近世以降の地震により地層が変形したと考えられる。また、近世の頃に上部が削平されており本来の深さについてはわからない。

039土坑 (図19)

不定形の土坑である。005溝に切り勝っている。黄灰色砂質シルトが褐灰色粘質シルトに沈み込む荷重痕が認められる。後述する土坑状変形の可能性もある。

080土坑 (図19)

東西2.4m、南北2.0m、深さ0.7mを測る。地層のすべりや荷重痕など地震による変形が顕著で土坑掘削当初の規模は不明である。東西の地層観察アゼに見られる5層の極細砂が東で切れており、5層より上の部分が東にすべったと考えられる。6・8層も東に大きく引きずられている。南北アゼの13・15・17層においても地層の変形が顕著である。

091土坑 (図19)

長さ1.7m、幅0.9m、深さ0.48mを測る不定形な土坑である。埋土の堆積状況から周囲からの土の流入により徐々に堆積していったものと考えられる。上部には近世の地層である灰白色粘質シルトが下に凸で混じっており荷重痕である。全体に地震による変形を受けており掘削当初の形状は保っていない。

102土坑 (図20)

長さ1.2m、幅0.8m、深さ0.6mを測る。埋土は、3層に大別できる。最下層の3層は細砂と粘質シルトの互層で水が流入したことにより堆積している。ある程度埋没した段階において瓦器碗(27～29)、瓦器皿(30)、須恵器鉢(31)が捨てられていた。その後も水の流入により堆積が進み、炭が廃棄

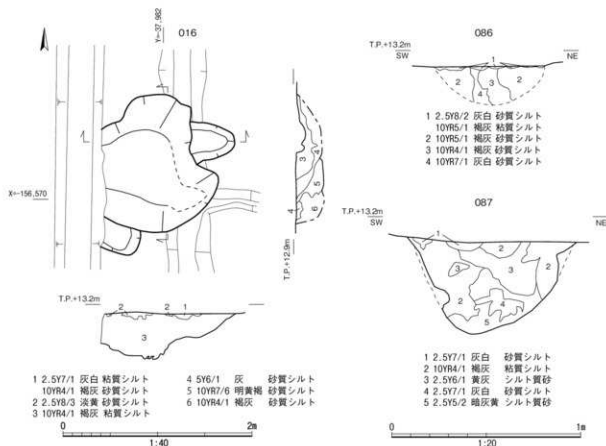


図21 地震による地層の変形平面・断面図

されている。その後は2層であるシルトが堆積し、最終的には1層で埋め戻されたと考えられる。出土した土器から11世紀後半に属する。

120 土坑 (図19)

長さ1.0 m、幅0.6 m、深さ0.15 mを測る。褐灰色粘質シルトが褐灰色砂質シルトに沈み込む荷重痕が認められる。後述する土坑状変形の可能性もある。

126 土坑 (図19)

長さ1.0 m、幅0.6 m、深さ0.3 mを測る。地震による変形が著しく黄灰色砂質シルトが下に凸の荷重痕が認められる。土坑状変形の可能性もある。

137 土坑 (図19)

直径約1.8 m、深さ0.7 mを測る。埋土は地震による変形が著しい。堆積状況は、まず底に周囲の土壌が流れ込んでいる。その直上から最上部まで偽礫が認められることから埋め戻されたと考えられる。

4. 地震による地層の変形 (図21)

016

松田・井上により定義された土坑状変形と考えられる(松田・井上2005)。北から南に向けて地層のすべりが認められる。また、黄灰色砂質シルトが褐灰色粘質シルトに沈み込む荷重痕が認められる。黄灰色砂質シルトは近世の耕作土であることから近世以降の地震により土坑状に地層が変形した結果と考えられる。005溝の断面にも変形が認められる。本項に記載しているが、地震の時期は不明である。

086・087

086・087は当初は溝と考え掘削していたが、断面観察の結果、地震による地層の変形構造であり、

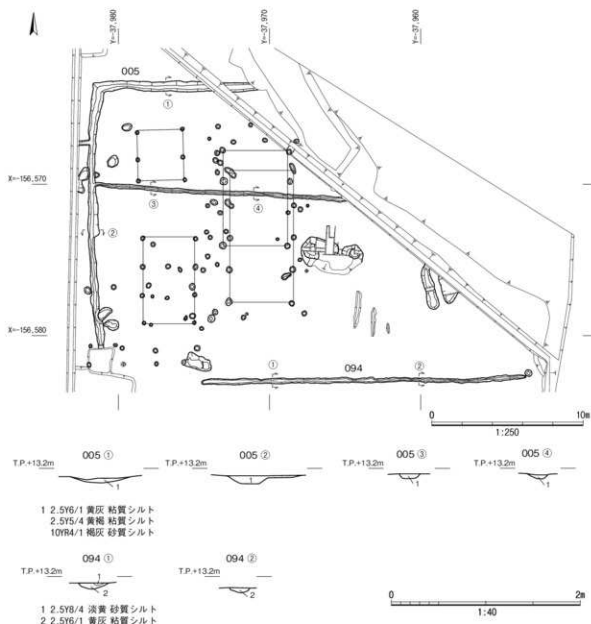


図22 005・094 溝平面・断面図

人為的な痕跡ではなかった。本項に記載しているが、地震の時期は不明である。

5. 溝

005・094 溝 (図22)

掘立柱建物の周囲を囲う溝を検出した。幅は0.2～0.6 mを測る。埋土は偽礫を含むことから埋め戻しにより埋没したと考えられる。南西隅に溝が掘削されていない箇所があり、この区画への出入口と考えられる。埋土から12世紀後半に属する土器(34・35)が出土した。

101 溝 (図23・24)

調査区の中央を東西に流れる溝である。幅は6.2 m、深さは1.4 mを測る。溝は2時期ありほぼ同じ場所で掘削し直されている。再掘削された溝を101 溝と呼称する。

掘削当初の溝の平面形については、およそ図23の形状であったと考えられる。当初の溝を190 溝と呼称する。南岸には190 溝と直交するように南へ延びる複数の支溝が掘削されている。支溝の一部は

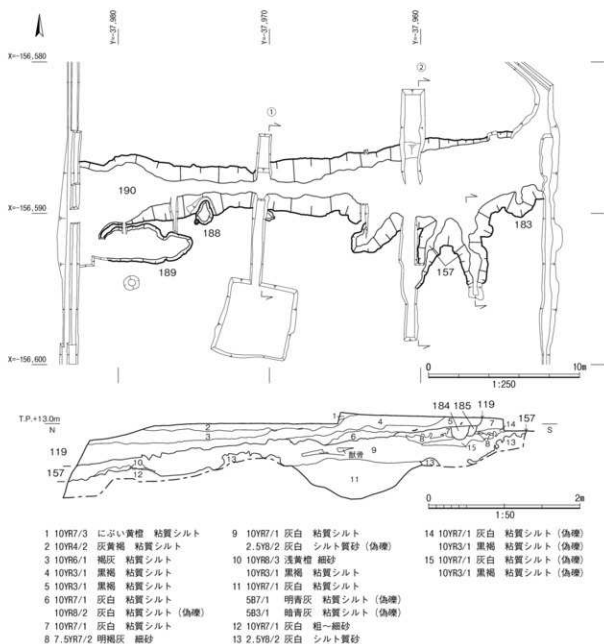


図23 157・183・188・189・190 平面図・119・157 断面図

157・183・188・189として新たな遺構番号を付して遺物を取り上げた。

地層の観察の結果、当初の溝がかなり埋没した段階で再度掘削されている。再度掘削された溝も流水により徐々に埋没し、廃棄流路となった後は盛土により埋め戻されている。

この溝からは大量の遺物が出土した。また、掘り直された溝の中にはウマの骨が廃棄されていた。骨は下顎骨、肩甲骨、腰椎骨が認められた。儀礼に伴うものであろうか。

119・157 溝

119と157の関係について述べる。119は第3層上面において精査した際に検出した遺構である。当初は土坑と認識し西側を半截し堆積状況を確認した。掘削の結果、土坑ではなくさらに北へと堆積が続くことが判明した。さらにサブトレンチにて堆積状況を確認した結果、190溝の南へと張り出す支溝の

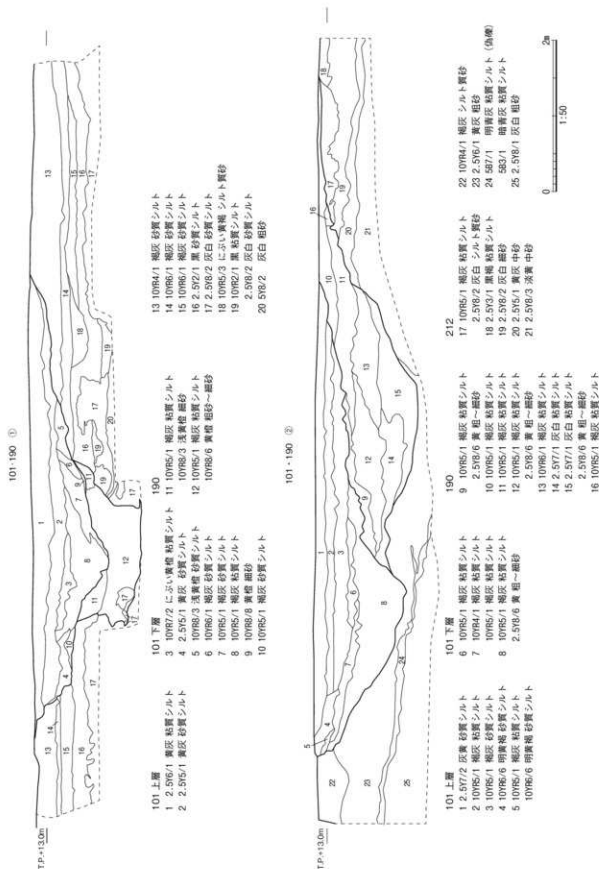


図24 101・190 断面図

一部であることが判明した。図23下段の図示のとおり119と認識していた部分は支溝が埋没した後の落ち込みに堆積した層であった。また、隣接して南西に伸びる部分も検出したことからこの箇所を含め157溝とした。

遺物については、「119」・「119上層」・「119拡張トレンチ」・「119下層」・「157」のラベルを付して取り上げている。断面観察の結果を整理すると「119」・「119拡張トレンチ」は119落ち込みと157が混在しており所属遺構は不明である。「119上層」は119落ち込みであり、「119下層」は157溝となる。第4章において119・157の遺物は取り上げラベルを基準として掲載する。

132・133・134・148溝

第4層上面において遺構検出を行った結果、X=-156,590～-156,600とY=37,965より西側においては119落ち込みと116・117柱穴が明瞭に検出できた。遺構の有無を確かめるため119落ち込みの周囲を残し任意に0.1mの深さで掘削した際に検出した遺構である。

134溝は135溝と切り合い関係があり、134が切り勝っている。いずれの溝も主軸は座標北と一致しており、148溝は直交する。掘立柱建物6が廃絶した後の耕作痕跡と考えられる。

第3項 近世以降（図25）

1. 土坑（図26）

001・002土坑

002土坑と重なり一部調査区外へと伸びており全形については判然としない。深さは0.15mを測る。埋土は最下層に粘質シルトが堆積しており機能時は滞水していたと考えられる。その後は埋め戻されている。002土坑は001土坑に切り勝っている。一部調査区外へと伸びているが、検出できた範囲では幅1.0m、深さ0.5mを測る。埋土から埋め戻しにより埋没したと考えられる。

099土坑

平面形態で凸の字形を呈する浅い土坑である。北側に段差が設けられており、約0.1mの比高差がある。低い部分の最下層には粘質シルトが堆積しており、機能時は滞水していたと考えられる。最終的には埋め戻されている。

127土坑

検出した範囲において、長さ19m、幅4m、深さ0.7mを測る。第1面の検出当初は、101溝の埋土の一部と認識して掘削を開始した。掘削が進むと埋土から陶器が出土したことから一旦掘削を中止し、平面として再度検出を行った。その結果、101溝とは異なる遺構であることが判明し、新たに遺構番号を付し掘削を行った。北側の一部については101溝として掘削してしまったため、平面形態は不明である。ただし、西壁では遺構の端を確認しており、南北の規模については記載値の通りである。埋土から、最下層には粘土が堆積しており機能時は滞水していたと考えられる。それより上部はいずれも偽礫を含む地層であることから埋め戻しにより埋没したものと考えられる。規模が大きいことから溜井であった可能性がある。16世紀末の陶器（275）が出土した。

146土坑

100溝を掘削した後に検出した土坑である。長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.3mを測る。最下層には砂が堆積しており葉理を確認することができる。上部は埋め戻しによる埋没である。100溝と並存していたと考える。

159土坑

長さ1.2m、幅0.9m、深さ0.4mを測る。偽礫を含む層が堆積しており、埋め戻されている。

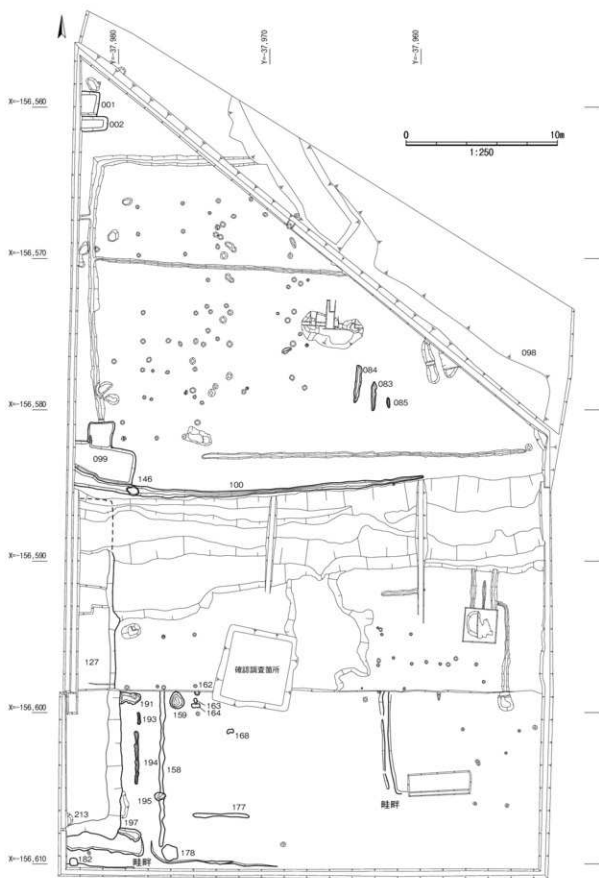


図25 近世以降遺構平面図

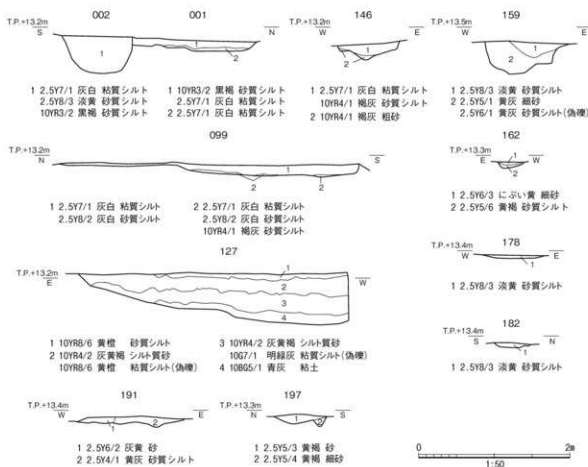


図 26 近世以降遺構断面図

178・182 土坑

178 は不定形で 182 は方形の土坑である。いずれも深度は 0.1 m 未満である。

2. 溝 (図 26)

083・084・085・163・164・167・168・169・170・177・193・194 溝

第 4 層上面で検出した鋤溝または耕作痕跡である。いずれも座標北に並行または直交する。

100 溝

長さ約 23 m を検出した。深さは 0.1 m を測る。溝の直ぐ南で段差を検出しており、水田の排水溝である。

1948 年に撮影された空中写真でもこの場所に水田の区画を確認することができる。

191・197 溝

いずれも砂が堆積しており、隣接する 127 土坑に水を落とすための排水溝である。

3. 畦畔

遺構番号を付していないが畦畔を検出した。鋤溝と同様に座標北に並行または直交する。

4. 段差

098

調査区の北東において段差を検出した。埋土は現代耕作土の直下に堆積した粗砂である。当初は現代河川と認識していたが、1948 年に撮影された空中写真において同じ場所に段差を認めることができる。時期は不明であるが落堀川の掘削に伴い掘削された段差と考えられる。現在の落堀川はコンクリート擁壁によって護岸されており、この河川改修に伴い埋没したと考えられる。

第4章 出土遺物

第1節 遺構出土遺物

第1項 平安時代後期～鎌倉時代前期

掘立柱建物2（図27・28）

1・2は瓦器碗である。1・2ともに器壁の摩滅が激しく調整については判然としない。1の口縁部のヨコナデによりわずかに2段となっている。いずれも和泉型瓦器碗のⅢ-1段階で12世紀後半と考えられる。3・4は土師器皿である。3は大皿に分類でき、口縁部と体部の境にわずかに段差が認められる。12世紀後半であろうか。4はいわゆる「て」字状口縁で11世紀後半の所産である。5・6は土師質土器羽釜の口縁部である。12世紀前半の所産である。25は073柱穴に残存していた柱材である。底面には金属工具による加工痕跡が明瞭に残る。上部にも加工痕跡が残されていた。上部の加工痕跡は柱を再利用するため根本部分を切断した痕跡と考えられる。樹種同定の結果、材質はヒノキであった。

掘立柱建物4（図27）

7は瓦器碗である。内外面ともに摩滅しており調整は不明である。器形から和泉型瓦器碗のⅡ-1段階で12世紀前半のものと考えられる。8は土師器皿である。口縁部は外方へと広がる形状を呈する。12世紀前半の所産である。9は瓦器碗である。口縁端部内面に沈線が施される。大和型瓦碗のⅢ-A

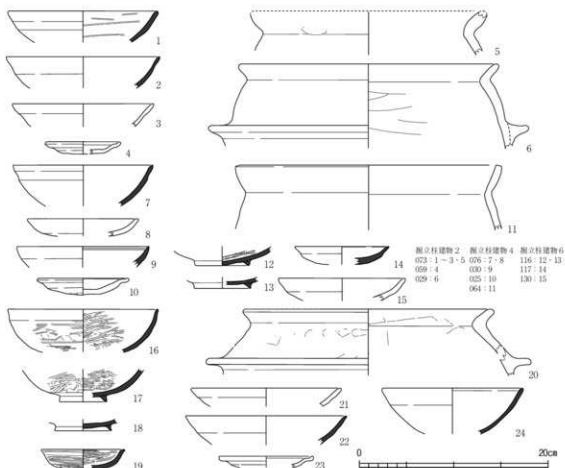


図27 掘立柱建物2・4・6・024・070・079柱穴・135溝出土遺物

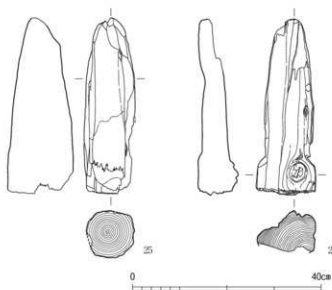


図28 073・021 柱穴出土柱材

施される。内外面ともに摩滅しており調整は不明である。12世紀前半であろうか。15は土師器皿である。口縁部は外方へと広がる。12世紀後半。

135 溝 (図27)

16～18は瓦器椀である。16は外面のヘラミガキが粗雑となり、内面のヘラミガキも間隔が広い。17・18は高台部分で、高台は高く断面三角形を呈する。17は外面のヘラミガキの分割は認められ、内面から見込みのヘラミガキはわずかな隙間が見られる。いずれも和泉型瓦器椀でⅡ-1段階で12世紀前半のものと考えられる。19は瓦器皿である。内外面及び底面にヘラミガキが施される。12世紀前半の所産である。20は土師質土器羽釜である。口縁部と頸部は接合しないが胎土及び色調が同じであることから一つの羽釜として復元した。

021 柱穴 (図28)

26は021柱穴に残存していた柱材である。底面には金属工具による加工痕跡が明瞭に残る。表面には加工痕跡が認められることから、ケズリが施されていた。加工面の反対は割れており半截した材と考えられる。樹種同定の結果、材質はコウヤマキであった。

024 柱穴 (図27)

21は土師器皿である。口縁部と体部の境にわずかな段差を設け口縁部は外方へと直線的に開く。内

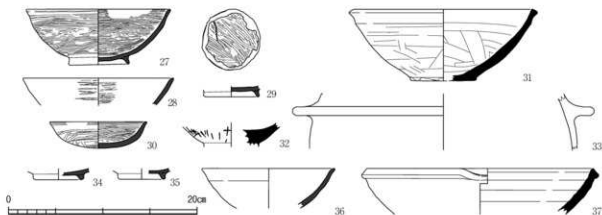


図29 102土坑・005・094・132 溝出土遺物

段階で12世紀後半から13世紀初頭の所産である。10は土師器皿である。いわゆる「て」字状口縁で11世紀後半の所産である。11は土師器鍋である。頸部において外方へと屈曲させ、口縁部は内湾し端部に面を持つ。12世紀の所産であろうか。

掘立柱建物6 (図27)

12・13は瓦器椀である。12は高台が三角形を呈し、見込みに格子状のヘラミガキが施される。和泉型瓦器のⅡ-1段階で12世紀前半と考えられる。13は内外面ともに摩滅しており調整は不明であるが、高台の形状から12と同時期と考えられる。14は瓦器皿である。口縁部を外反させ、端部内面に沈線が

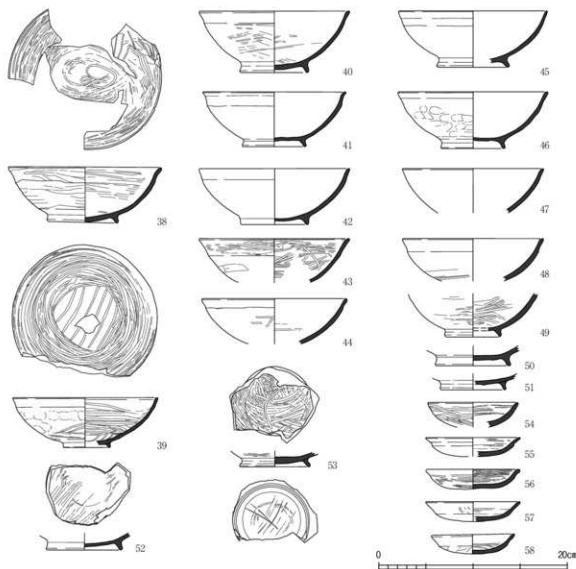


図30 101 溝出土遺物 (1)

外面ともに摩滅しており調整は不明である。11世紀後半と考えられる。

070 柱穴 (図27)

22は瓦器碗である。内外面ともに摩滅しており調整は不明であるが、器壁がやや薄く径が17cmで復元できることから和泉型瓦器碗のⅡ-1段階で12世紀前半のものと考えられる。

079 柱穴 (図27)

23は土師器皿である。いわゆる「て」字状口縁で11世紀後半の所産である。

204 柱穴 (図27)

24は瓦器碗である。内外面ともに摩滅しており調整は不明である。口縁部が短く、復元径が14.7cmであることから和泉型瓦器碗のⅡ-1段階で12世紀前半のものと考えられる。

102 土坑 (図29)

27～29は瓦器碗である。27は内外面ともに密にヘラミガキが施される。29は高台のみであるが見込みに密にヘラミガキが施される。いずれも和泉型瓦器碗のⅠ-2段階のものと考えられる。30は瓦器皿である。内外面および底面に密にヘラミガキが施される。31は須恵器鉢である。内湾気味の口縁

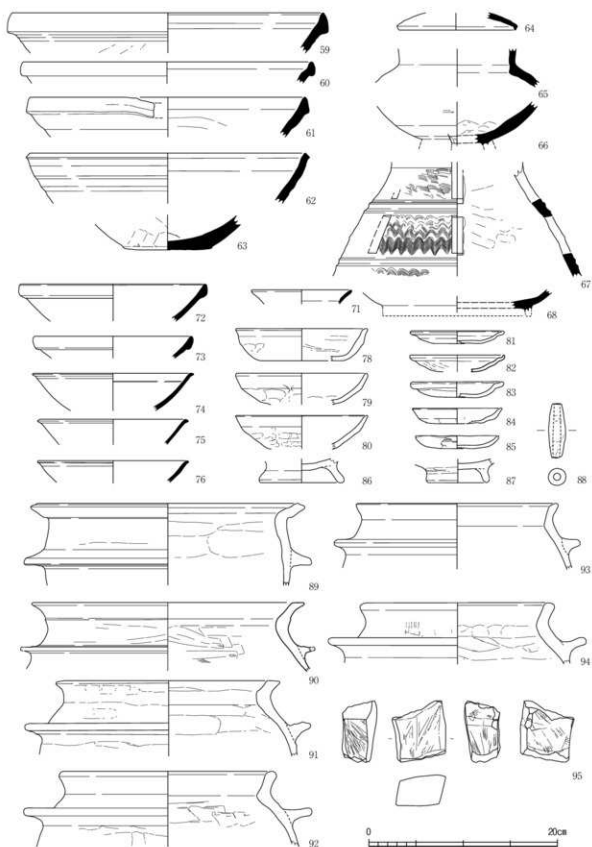


図31 101 溝出土遺物 (2)

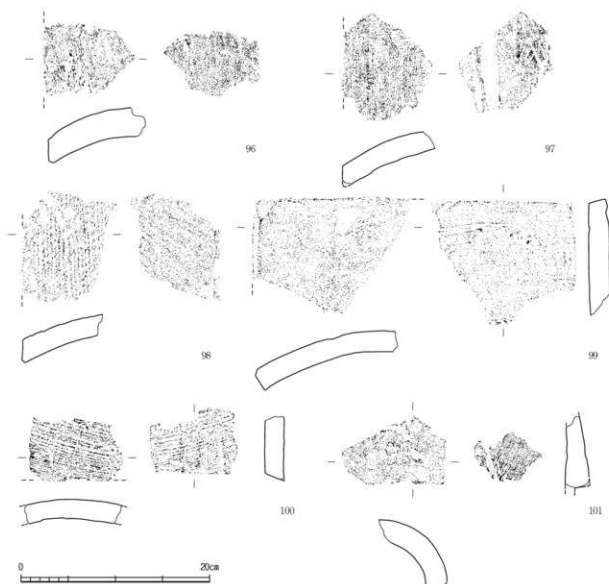


図32 101溝出土遺物(3)

部で端部は外方へと拡張させる。この外方への拡張により外面には強いナデが廻り体部との境に段差を形成する。内外面ともに丁寧なナデ調整であるが、底面は器壁が毛羽立ちわずかにハケメがみられる。須恵器と記載しているが口縁部に炭の吸着が認められ瓦質の様相を呈している。32は青磁碗である。あまり発色の良くない青磁釉が内外面及び高台外面に施されている。外面には縦方向に細線彫りが認められる。高台内側は露胎で胎土は赤褐色を呈する。33は土師質土器羽釜である。いずれの土器も11世紀後半の所産と考えられる。

005 溝 (図29)

34は瓦器碗である。内外面ともに摩滅しており調整は不明である。高台の断面形は三角形を呈する。12世紀後半と考えられる。

094 溝 (図29)

35は瓦器碗である。内外面ともに摩滅しており調整は不明である。高台は断面台形を呈しており、12世紀後半と考えられる。

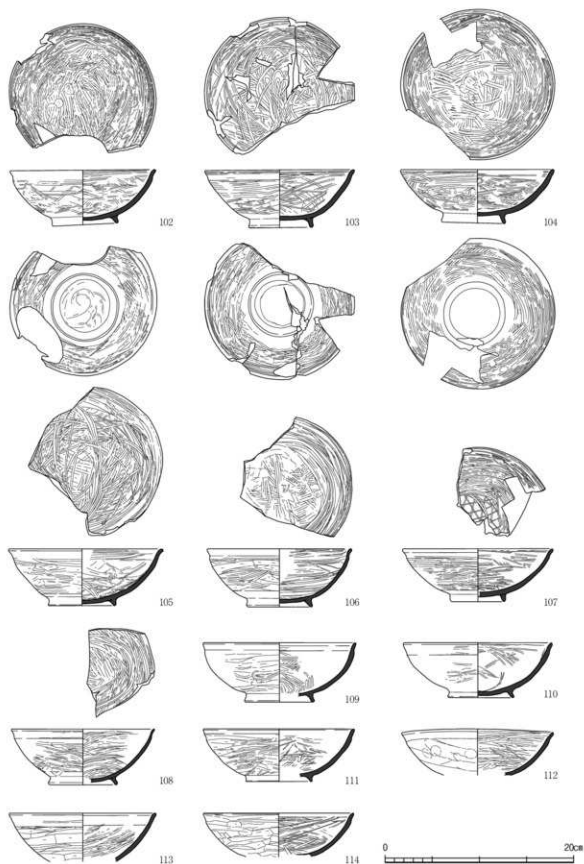


図33 101 満出土遺物 (4)

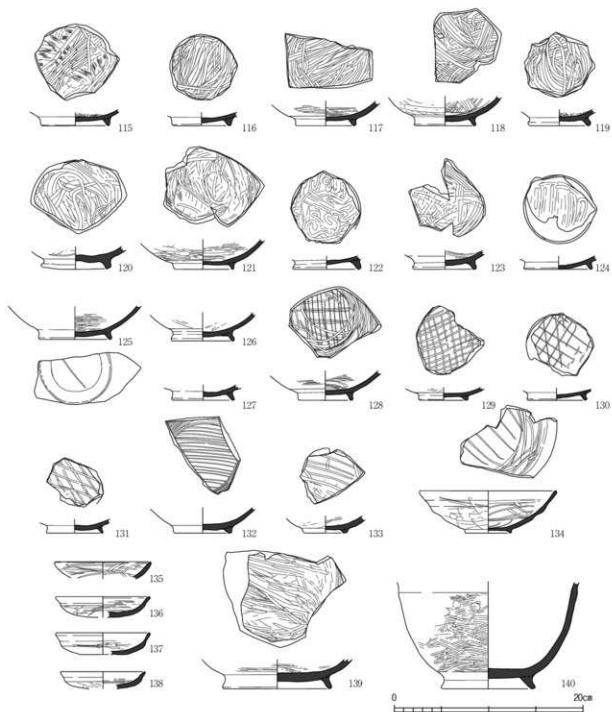


図34 101溝出土遺物(5)

132溝(図29)

36は瓦器碗である。内外面ともに摩滅しており調整は不明である。口縁部が短いことから和泉型瓦器碗のⅡ-1段階で12世紀前半のものと考えられる。37は東播系須恵器鉢である。口縁端部を上下に拡張させる。12世紀中葉と考えられる。

101溝(図30～36)

上層

38～53は瓦器碗である。38・40は内外面ともに密にヘラミガキが施される。また、52・53は見込

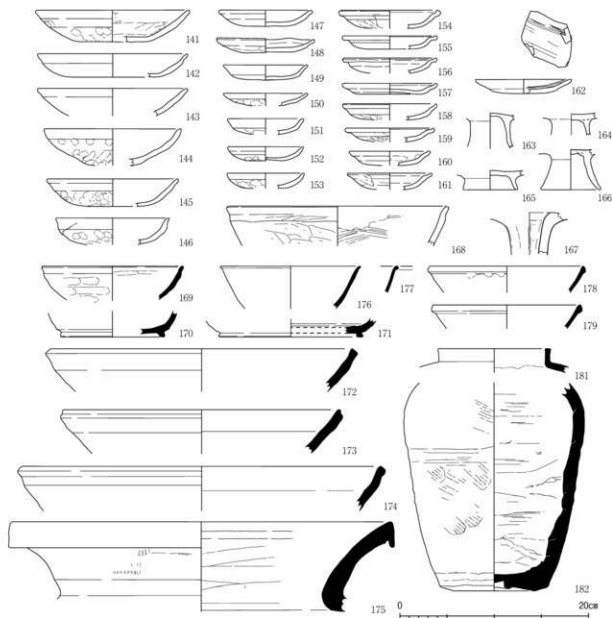


図35 101 溝出土遺物(6)

みに密なヘラミガキが施される。和泉型瓦器碗のⅠ－２段階。43は内外面のヘラミガキは粗雑化しており、和泉型瓦器碗のⅡ－１段階。39は外面に粗雑なヘラミガキが施され、見込みには平行するヘラミガキが施される。また、高台は断面三角形を呈する。和泉型瓦器碗のⅡ－２段階。その他は内外面ともに摩滅しており調整は不明であるが、和泉型瓦器碗のⅠ－３からⅡ－１段階で、11世紀末から12世紀初頭のものと考えられる。49・50は焼成不良の瓦器碗と考えたが、土師師の可能性もある。54～58は瓦器皿である。54～56は内外面ともに密にヘラミガキが施される。12世紀前半のものと考えられる。58の見込みには平行するヘラミガキが施される。12世紀半ばであろう。59～63は東播系須恵器鉢である。59は口縁部の面が器壁に対し外傾し、明瞭な縁帯がある。また60は口縁端部が全体的に丸みを帯びている。61は口縁部の面が器壁に対し外傾し、この面をシャープに成形している。いずれもⅢ－２類で13世紀前半である。62は口縁部が外反せず、体部は湾曲しておりⅠ－２類に分類される。11世紀後半のものと考えられる。64は須恵器杯蓋である。65は須恵器壺である。9～10世紀であろうか。

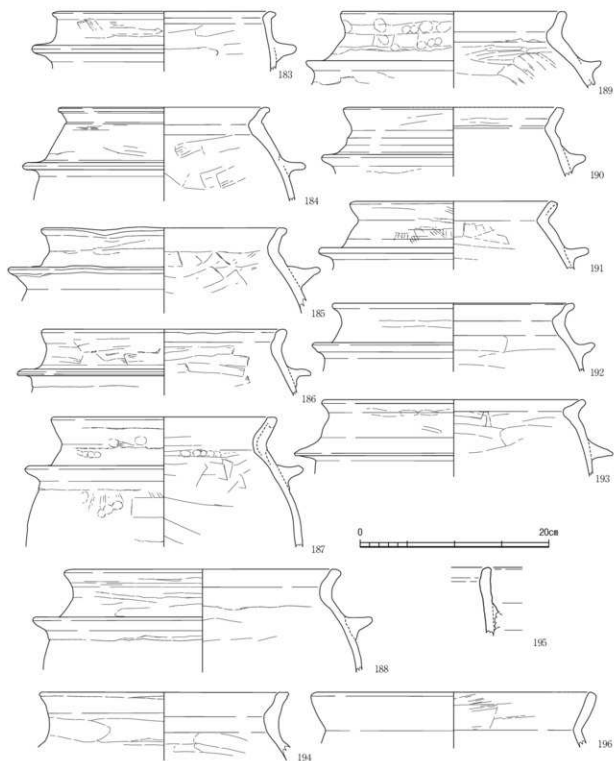


図36 101 溝出土遺物 (7)

66は台付壺である。壺の底部に脚部の接合痕と透穴が残る。6世紀後半くらいであろうか。67は須恵器器台である。台部の口径が大きく、文様帯には1条以上の波状文を数える。TK23型式からTK47型式で5世紀後半の所産と考えられる。68・69は緑釉陶器椀である。焼成は須恵質である。9世紀であろうか。図化していないが70は青磁碗である。内面には蓮華文が篋や櫛により描かれている。71は青磁皿である。内面に圈線が篋により描かれている。いずれも龍泉・同安窯系青磁で11世紀後半から12

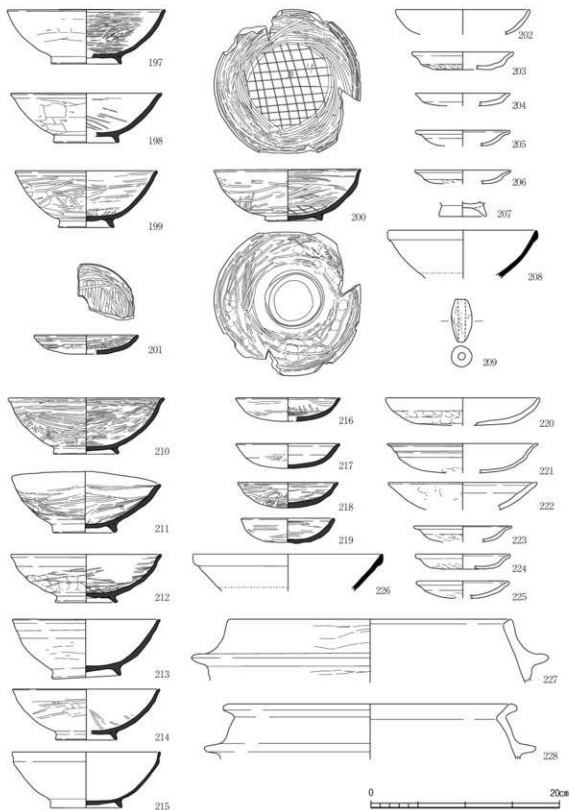


図 37 119 上層・下層出土遺物

世紀初頭の所産と考えられる。72～76は白磁碗である。72・74は胎土に微細な黒斑を含み、釉薬に気泡が目立つ。図化していないが77も白磁碗の体部で内面に窺による圏線が認められる。11世紀後半から12世紀初頭の所産と考えられる。78は土師器杯である。口縁部をわずかに外方へと広げる。11世紀

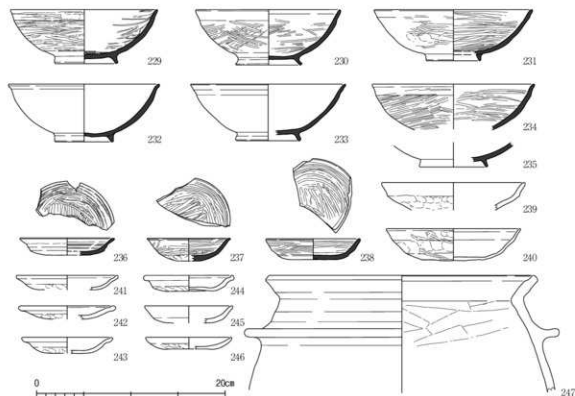


図38 119 出土遺物

後半であろうか。79・80は土師器碗である。9世紀代であろう。81～85は土師器皿である。81～83はいわゆる「て」字状口縁部で11世紀後半のものと考えられる。84は口縁部を外方へとわずかに広げる。12世紀前半のものと考えられる。85は粗雑な成形で底面に粘土を繋ぎ合わせた痕跡が残る。12世紀後半から13世紀のものと推測する。86・87は土師器鉢の高台である。88は土鍾である。89～94は土師質土器羽釜である。89は口径が約29cmで鐏部はやや下方に向く。その他のものは口径が20～25cm程度のものである。口縁部はいずれも外反し、90・91・93は端部に平坦な面を持つ。92・94の端部は丸くおさめる。鐏部はやや上方に向く。いずれも12世紀前半の所産と考えられる。95は砥石である。砂岩で側面には細かな擦痕が残る。上下は直接打撃により剝離しており、小型化している。一部に被熱に伴う煤が付着する。96～100は平瓦、101は丸瓦である。96・97・101の凹面には目の細かい布目残り、98・99・100には糸切り痕が残る。また、96・98・99は側縁に面取りがなされている。12～13世紀代の所産と考える。

下層

102～134は瓦器碗である。102～108は外面にはヘラミガキが全面に施されるが高台付近は省略されている。105・106・111・114の外面にはヘラケズリがみられる。和泉型瓦器碗のⅠ-2・3段階で11世紀後半の所産である。128～134は見込みに粗い格子状または平行線状のヘラミガキを施す。128～132は和泉型瓦器碗のⅡ-1段階。133は高台が低く和泉型瓦器碗のⅡ-3段階である。134は外面のヘラミガキがなく、内面のヘラミガキも粗雑である。見込みには粗い平行線状のヘラミガキみられる。和泉型瓦器碗のⅢ-1段階で12世紀後半である。135～138は瓦器皿である。いずれも内外面ともに密にヘラミガキが施される。135は内湾気味の口縁部を持ち、136～138は口縁部を外反させ体部との境に明瞭な段を成形する。136は口縁端部内面に段差を成形する。12世紀前半の所産と考えられる。139・140は瓦器鉢である。139は内外面および底面に密にヘラミガキが施される。140は内外面に密に

ヘラミガキが施される。141～162は土師器皿である。141～146は大皿に分類され、他は小皿に分類される。141は口縁部のナデ調整が2段になっている。142～146は口縁部をわずかに外反させる。154～161は「て」字状口縁である。11世紀後半の所産と考えられる。162は口縁部と体部の境に明瞭な段差を成形し、内面にハケメ調整ののちナデ調整が施される。15世紀の可能性もあるが、判然としない。163～166は台付皿または杯である。167は土師器高杯である。脚柱部外面には面取りが施される。9世紀後半。168は黒色土器碗である。内黒焼成である。10世紀前半であろう。169～171は須恵器杯である。169は口縁部外面のナデ調整により口縁部と体部の境に段差を成形する。9世紀後半。170・171は貼り付け高台を持つ。9世紀代の所産である。172～174は東播系須恵器鉢である。172は口縁部が外反せず、体部は湾曲している。Ⅰ～Ⅱ類に分類される。11世紀後半のものと考えられる。173は口縁部の面が器壁に対し直行し、上方に口縁部端を拡張することからⅡ～Ⅲ類に分類される。12世紀前半のものと考えられる。174は口縁部の面が器壁に対して外傾し口縁部内面はナデにより大きくくぼむ。Ⅲ～Ⅳ類に分類され、12世紀後半のものと考えられる。175は須恵器甕である。垂下状口縁を持つ大甕で9世紀前半の所産である。176～179は白磁碗である。176・177は口縁部端部を外反させ、178・179は玉縁状の口縁部を持つ。11世紀後半から12世紀前半のものと考えられる。図化していないが180は緑釉陶器碗である。胎土は須恵質である。9世紀であろうか。181・182は須恵器壺である。181は短頸壺で9世紀の所産であろうか。182は肩部と体部の境目はなく胴部上部に最大径を持ち底部に向かってすばまる器形である。外面には自然釉がかかり内面見込みに自然釉がかかる。底面は自然釉がかかるとともに焼台との溶着を剥離したため大きく欠損している。9世紀後半のものと考えられる。183～194は土師質土器羽釜である。頸部を「く」の字に屈曲させ外方へと広がる口縁部を持つ。頸は上方または水平方向に延びる。12世紀前半から12世紀半ばの所産と考えられる。195は土師質土器羽釜であるが、口縁部を内傾させ、端部も器壁に対して内傾する。196は土師器甕である。頸部で外屈させ内湾する口縁部を持つ。口縁部内面にはハケメ調整を施す。

119

上層=119 落ち込み (図37)

197～200は瓦器碗である。197～199は外面にヘラケズリがみられる。和泉型瓦器碗のⅠ～Ⅲ段階で11世紀末のものである。200は外面のヘラケズリは粗雑で見込みは格子状のヘラミガキを施す。高台は断面三角形を呈する。和泉型瓦器碗のⅡ～Ⅲ段階で12世紀前半のものと考えられる。201は瓦器皿である。内外面ともに密にヘラミガキが施される。202～206は土師器皿である。202の口縁部は内湾気味で端部は丸くおさめる。12世紀半ば。203・204の口縁部は外方へと広がる。12世紀前半。205・206は「て」字状口縁である。11世紀後半。207は台付皿である。208は白磁碗である。胎土に微細な黒斑を含み、釉薬には気泡が多く含まれる。また、外面底部付近は露胎となっている。11世紀後半から12世紀前半のものと考えられる。209は土鍾である。

下層=157 溝 (図37)

210～215は瓦器碗である。210・212は外面のヘラミガキが分割されており、見込みに密にヘラミガキが施される。213は外面にヘラケズリが施されている。和泉型瓦器碗のⅠ～Ⅱ段階。214は外面のヘラミガキに隙間がある。和泉型瓦器碗のⅠ～Ⅲ段階。212は外面のヘラミガキが粗雑となっており、見込みは格子状のヘラミガキを施している。和泉型瓦器碗のⅡ～Ⅲ段階。これらは11世紀後半から12世紀前半のものと考えられる。216～219は瓦器皿である。内外面ともに密にヘラミガキが施される。12世紀前半。220～225は土師器皿である。220～222は大皿に分類される。220は内湾気味の口縁部に端部は丸くおさめる。12世紀前半。221は口縁部が外反し外方へと張り出す。2段のナデ調整が施さ

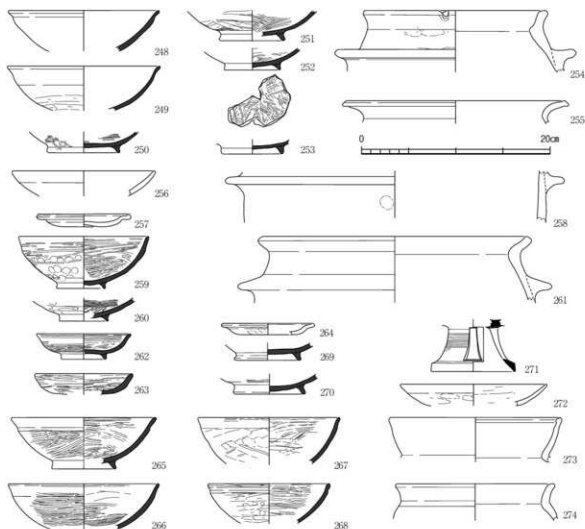


図39 157・183・188・189・190 溝出土遺物

れる。11世紀前半。222は外方へと開く口縁部である。223～225は「て」字状口縁である。11世紀後半。226は白磁碗である。玉縁状の口縁部を持ち胎土に微細な黒斑を含む。釉薬には気泡が多く含まれ、外面底部付近は露胎となっている。11世紀後半から12世紀前半のものと考えられる。227・228は土師質土器羽釜である。227は内傾する口縁部で端部に器壁に対して内傾する面を持つ。

119 = 119 落ち込み・157 溝 (図38)

229～235は瓦器碗である。外面には分割してヘラミガキを施し、内面は密にヘラミガキが施される。和泉型瓦器碗の1～2～3段階で11世紀後半のものと考えられる。236～238は瓦器皿である。内外面ともに密にヘラミガキが施される。12世紀前半。239～246は土師器皿である。239・240は大皿に分類される。239・240の口縁部はともに外反し外方へと広がる。11世紀後半。241～246はいずれも小皿に分類される。241～244は「て」字状口縁である。11世紀後半。245は僅かに外反する口縁部を持ち、246は外方へと広がる口縁部を持ち端部は丸くおさめる。12世紀前半であろうか。247は土師質土器羽釜である。

157 溝 (図39)

248～253は瓦器碗である。249は外面にヘラケズリを施す。251は外面にヘラケズリを施し、見込みには密にヘラミガキを施す。いずれも和泉型瓦器碗の1～3段階で11世紀末のものと考えられる。

254は土師質土器羽釜である。255は土師器甕である。頸部から大きく外反する口縁部を持ち端部は上方へと拡張させ端部に段差を成形する。9世紀か。

183 溝 (図 39)

256・257は土師器皿である。256は外方へと広がる口縁部を持ち、257は「て」字状口縁である。いずれも11世紀後半。258は土師質土器羽釜である。

189 溝 (図 39)

259・260は瓦器椀である。259は外面のヘラミガキが粗雑化しており、見込みには平行状のヘラミガキを施す。高台は断面三角形を呈する。和泉型瓦器椀のⅡ-2段階で12世紀半ばのものと考えられる。261は土師質土器羽釜である。

188 溝 (図 39)

262は高台を持つ瓦器皿である。内外面ともに密にヘラミガキが施される。11世紀後半であろうか。

190 溝 (図 39)

図 24-101・190 ② 10～14 層

263は瓦器皿である。264は土師器皿である。「て」字状口縁である。いずれも11世紀後半。

図 24-101・190 ① 12層・② 15層

265～270は瓦器椀である。265・266は和泉型瓦器椀のⅠ-2段階で11世紀半ばのものと考えられる。268は外面にヘラケズリが施され、内面は密にヘラミガキが施される。267とともに和泉型瓦器椀のⅠ-3段階である。269・270は高台部分のみで見込みにも密にヘラミガキが施される。和泉型瓦器椀のⅠ-3段階で11世紀末のものと考えられる。271は須恵器高杯である。外面にはカキメが施される。透孔は長方形で4方向1段である。TK47型式併行期。272は土師器皿である。外方へと広がる口縁部を持つ。11世紀後半であろう。273・274は土師器甕である。273は内湾する口縁部に端部は内側へと肥厚させる。辻幅年2古段階である。274は短く外反する口縁部を持ち、外面はナデ調整である。9世紀後半の所産である。

第2項 近世以降

127 土坑 (図 40)

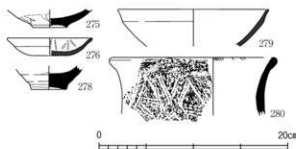
275は陶器碗である。体部下半は露胎で高台はわずかに成形されている。高台見込みに兜巾がみられる。16世紀末と考えられる。276は瓦器皿である。見込みに粗く平行するヘラミガキを施す。12世紀後半。図化していないが277は鉾澤である。

158 溝 (図 40)

278は陶器碗である。体部下半は露胎で高台はわずかに成形されている。16世紀末と考えられる。

159 土坑 (図 40)

279は瓦器椀である。内外面ともに摩滅しており調整は不明である。和泉型瓦器椀のⅡ-1か2段階で12世紀前半であろう。



表探 (図 40)

調査区内において縄文土器(280)を表面採取した。小型の深鉢で外反する平口縁である。外面には菱形区画文を施す。また、菱形区画文の沈線間に粒の粗い縄文を施す。口縁端部の内外面にも縄文を施す。船元Ⅲ式。

図 40 127 土坑・158 溝・159 土坑出土遺物・表探遺物

第5章 自然科学分析

第1節 太田遺跡出土柱材の樹種同定

株式会社イビソク

はじめに

太田遺跡から出土した柱材の樹種同定を行った。

試料と方法

試料は、柱材2点である。発掘調査所見によれば、柱穴の時期は12世紀後半と考えられている。

樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柃目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行った。

結果

同定の結果、試料1は針葉樹のヒノキ、試料2は針葉樹のコウヤマキであった。同定結果を表2に示す。

表2 太田遺跡出土柱材の樹種同定結果

試料番号	遺構	登録番号	種類	樹種	木取り	時期
1	073	219	柱材	ヒノキ	芯去削出	12世紀後半
2	021	216	柱材	コウヤマキ	芯去削出	12世紀後半

以下に、同定された材の特徴を記載し、図41に光学顕微鏡写真を示す。

(1) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ1～15列である。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、1分野に2個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

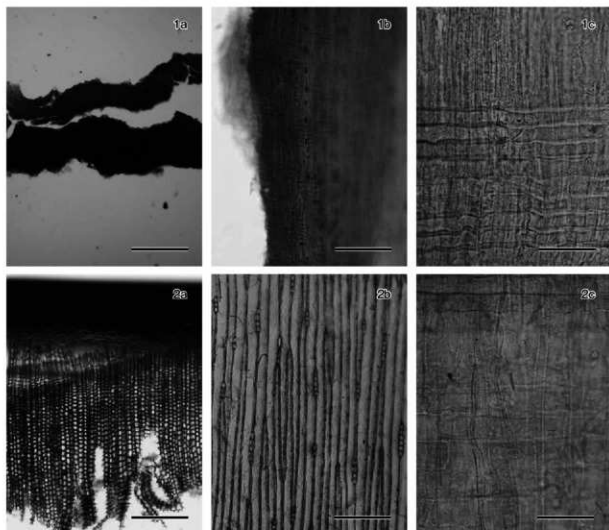
(2) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1～5列となる。分野壁孔は窓状である。

コウヤマキは温帯から暖帯にかけて隔離分布をしている1科1属1種の常緑高木の針葉樹で、日本の固有種である。材はやや軽軟、切削などは容易で、水湿に耐朽性がある。

考察

同定の結果、柱材2点はヒノキとコウヤマキであった。ヒノキとコウヤマキは木理通直でまっすぐに生育する、加工性の良い樹種である（伊東ほか2011）。大阪府内で確認されている平安時代の柱材では、ヒノキやコウヤマキがみられ（伊東・山田編2012）、傾向は一致する。



1a-c: ヒノキ 2a-c: コウヤマキ

a: 横断面(スケール=500 μ m) b: 接線断面(スケール=200 μ m) c: 放射断面(スケール=50 μ m)

図 41 太田遺跡出土柱材の光学顕微鏡写真

引用・参考文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 2011『日本有用樹木誌』p.238, 海青社
伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学—出土木製品用材データベース—』p.449, 海青社

技術協力

小林克也氏 (株式会社パレオ・ラボ)

第6章 総括

第1節 平安時代後期～鎌倉時代前期の集落の様相

今回の調査では平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての集落を検出することができた。ここでは、既存の調査成果を踏まえ平安時代後期から鎌倉時代前期の西水川西側の様相について述べ総括とする。

11世紀後半

今回の調査において5世紀や9世紀の遺物が出土しているが人の活動が認められるのは11世紀後半からである。平安時代後期以前の自然流路を検出しており、この流路が埋没し盛土による造成を経たのち集落が営まれている。

この時期の遺構としては掘立柱建物3を1棟検出した。TD2014-3においては複数の掘立柱建物が検出されており、一定の距離をおいて散在して居住している様相が復元されている。今回の調査においても1棟のみであり同様の様相を迫認する結果である。

101溝は11世紀後半から13世紀にかけて機能した坪境溝と考えられる。TD2014-3で検出したL字に屈曲する525・981・982大溝は12世紀代から13世紀初頭にかけて機能しており、関連する遺構と考えられる。各溝の中心間の距離で南北約194mを測る。

12世紀前半

掘立柱建物6および135溝がこの時期にあたる。TD2014-3では引き続き複数の掘立柱建物が存続している。また、府82-1および府21017において新たに人の居住が認められる。これらの調査では建物としては復元できていないが多数の柱穴を検出しており、一定の居住域において集住していた様子が復元できる。今回の調査では1棟のみの検出であり当該地域は閑散としていた様相が復元できる。

12世紀半ば～後半

方形に3辺を区画する溝とその中に掘立柱建物を4棟検出した。掘立柱建物2と掘立柱建物4は重複しており、また建物に復元した柱の直ぐ近くにも柱穴を複数検出していることから建て替えながら一定期間居住域として利用されていたと考えられる。府82-1の北西端にあるWSK08において12世紀半ばから末にかけての土坑を検出しており、この付近で居住域が広がっていたものと推測する。また、方形の溝については居住域を区画するためであり、TD2014-3で想定されている居住域③と同規模となる。

132・133・134溝は切り合い関係から掘立柱建物6が廃絶し101溝がほぼ埋没した状況で掘削された耕作に伴う溝である。101溝より南側については建物が廃絶した直後に耕作地へと変貌したものと考えられる。府21017では12世紀前半の掘立柱建物を検出した直上で耕作に伴う溝を検出しており、同様の様相である。

12世紀半ばから西水川以西の集落については衰微傾向にあると指摘されているが、今回の調査成果を踏まれば継続して居住している部分はありつつも、居住域は耕作地へと変化していったといえることができる。

13世紀前半以降

101溝が完全に埋没し、人々の居住が認められなくなる。以後は耕作地へと変貌したと考えられるが、近世の耕作に伴う削平により詳細は不明である。

XNS-IIにおいて掘立柱建物を複数検出しており、13世紀代の所産と考えられている。府86-1・TD86-1で12世紀後半から13世紀前半にかけての掘立柱建物を検出しており、この時期の居住域は西

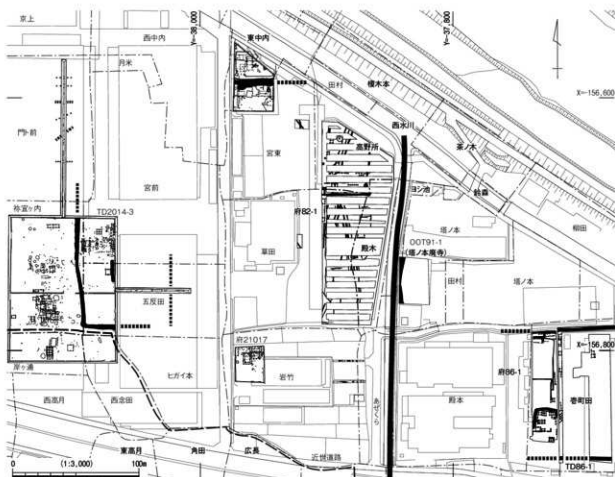


図42 調査地周辺における平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての遺構平面図

水川以東で広がっている。

引用・参考文献

井上智博・大庭重信 2020 「縄文時代晩期～奈良時代の地形発達と路路変遷」研究代表者大庭重信「先史・古代の河内平野南部地域の古地理復元を通じたジオアーケオロジーの実践研究－2017年度～2019年度科学研究費基盤(C)（一般）成果報告書－」一般財団法人大阪市文化財協会

岩崎二郎編 1992『津堂遺跡』大阪府文化財調査報告書 第43輯 大阪府教育委員会

大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものとし-陶器の須恵器』大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40

古代学協会・古代学研究所編 1994『平安京提要』角川書店

中世土器研究会編 1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

註 美紀 2002「河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原遺跡発掘調査報告Ⅸ』財団法人大阪市文化座協会

笹栗 拓編 2016『津堂遺跡』 藤井寺市文化財報告 39 公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 273 藤井寺市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター

参考文献 拓 2020「古市古墳群周辺の土地利用と地域開発」『大阪文化財研究』第53号 公益財団法人大阪府文化財センター

日本中世土器研究会編 2022「新版概説中世の土器・陶磁器」直隸社

原田昌則 2008 「太田遺跡第1次発掘調査報告書」財団法人八尾市文化財調査研究会報告 108

平尾政幸 2019「土師器再考」〔洛中〕研究紀要第 12 号 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

松田順一郎・井上智博 2005「風倒木痕とは似て非なる古地震痕跡－大阪府讃良郡条里遺跡の例」『日本文化財科学会第22回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 pp.158-159

観察表

採回 番号	遺物 番号	図版 番号	遺構・ 層位	種類	器種	法量 ① は復元値				色調	備考
						口径	器高	底径・ 高台径	その他		
27	1	22	073	瓦器	鉢	(15.7)	残 3.3		(内) N3-0 硝灰 (外) 25Y7/1 灰白 25Y3/1 黒褐		
27	2	22	073	瓦器	鉢	(16.2)	残 3.3		(内) 25Y7/1 黒褐 N6-0 灰 (外) 10YR8-2 灰白		
27	3	22	073	土師器	皿	(15.0)	残 2.4		(内) 75YR8-3 浅黄褐色 (外) 5YR8/4 淡褐色		
27	4	11	059	土師器	皿	(7.6)	1.3		(内) 5YR8/4 淡褐色 (外) 75YR5/3 に近い 10YR6/3 に近い黄褐色		
27	5	22	073	土師質土器	羽釜		残 4.5		(内) 5YR7/4 に近い 10YR7/3 に近い黄褐色 (外) 75YR8-2 灰白 75YR2/1 黒 75YR3/1 黒褐		
27	6	11	029	土師質土器	羽釜	(27.0)	残 8.9		(内) 10YR8-3 浅黄褐色 (外) N4-0 灰 N6-0 灰		
27	7	22	076	瓦器	鉢	(14.8)	残 4.3		(内) N3-0 硝灰 N6-0 灰 (外) 10YR8-2 灰白		
27	8	22	076	土師器	皿	(11.6)	残 1.8		(内) 10YR8-1 灰白 (外) 5YR2/1 黒褐		
27	9	11	030	瓦器	鉢	(13.8)	残 2.2		(内) 5YR2/1 黒褐 (外) 10YR8-3 浅黄褐色		
27	10	11	025	土師器	皿	9.4	1.8		(内) 75YR8-3 浅黄褐色 5YR8/4 淡褐色 (外) 10YR3/1 黒褐 10YR4/1 黒灰		
27	11	11	064	土師器	鍋	(27.2)	残 6.9		(内) 10YR3/1 黒褐 10YR5/3 に近い黄褐色 (外) N4-0 灰 N7-0 灰白		
27	12	11	116	瓦器	鉢		残 2.0 (5.5)		(内) N3-0 硝灰 (外) N4-0 灰 N6-0 灰		
27	13	11	116	瓦器	鉢		残 1.2 (6.0)		(内) N5-0 灰 (外) N4-0 灰		
27	14	11	117	瓦器	皿	(10.0)	残 1.9		(内) N4-0 灰 (外) 10YR8-2 灰白		
27	15	11	130	土師器	皿	(13.4)	残 2.3		(内) 10YR8-2 灰白 (外) N6-0 灰 N4-0 灰		
27	16	11	135	瓦器	鉢	(15.7)	残 4.55		(内) N5-0 灰 (外) N4-0 灰		
27	17	11	135	瓦器	鉢		残 3.4 (4.8)		(内) N5-0 灰 (外) N2-0 黒 75YR8-8 褐色		
27	18	11	135	瓦器	鉢		残 1.2 (5.8)		(内) N3-0 硝灰 (外) N4-0 灰		
27	19	11	135	瓦器	皿	(8.6)	2.2		(内) N4-0 灰 (外) 5YR6-6 褐色 75YR8-1 灰白		
27	20	11	135	土師質土器	羽釜	(26.0)	残 4.7	円縁 (34.5)	(内) 5YR6-6 褐色 75YR8-1 灰白 (外) 10YR6-6 明黄褐色 5YR6/4 に近い黄褐色		
27	21	11	024	土師器	皿	(15.6)	残 1.9		(内) 10YR5-2 灰黄褐色 10YR2/1 黒 (外) N3-0 硝灰		
27	22	11	070	瓦器	鉢	(17.0)	残 3.0		(内) N3-0 硝灰 (外) 10YR8-2 灰白		
27	23	11	079	土師器	皿	(9.8)	残 1.2		(内) 10YR8-2 灰白 (外) N7-0 灰白 N3-0 硝灰		
27	24	11	204	瓦器	鉢	(14.7)	4.8		(内) N7-0 灰白 N3-0 硝灰 (外) N2-0 黒 N7-0 灰白		
28	25		073	柱					長 37.1 径 13.8		ヒノキ
28	26		021	柱					長 37.3 径 12.7		コウヤマキ
29	27	11	102	瓦器	鉢	15.0	5.9	6.1	(内) N3-0 硝灰 (外) 25Y8-1 灰白		
29	28	11	102	瓦器	鉢	(15.8)	残 2.9		(内) 5YR-1 灰白 (外) N4-0 灰		
29	29	11	102	瓦器	鉢		残 1.1	5.5	(内) N3-0 硝灰 N2-0 黒 (外) N3-0 硝灰		
29	30	11	102	瓦器	皿	10.1	2.8		(内) N3-0 硝灰 (外) N7-0 灰白		
29	31	11	102	須恵器	鉢	(18.9)	7.55	(7.0)	(内) N8-0 灰白 (外) 75YR6/4 に近い黄褐色 75Y6/2 灰オリーブ		
29	32	11	102	青磁	鉢		残 2.5 (6.0)		(内) 輪 10YR8-1 灰白 (外) 5YR5-6 明黄褐色 5YR8-1 灰白 10YR5-2 灰黄褐色		
29	33	11	102	土師質土器	羽釜		残 6.0	円縁 (32.0)	(内) 5YR6-6 褐色 (外) N4-0 灰 25Y5/3 黄褐色		
29	34	11	005	瓦器	鉢		残 1.2 (5.4)		(内) 10YR6-6 明黄褐色 (外) 10YR6-6 明黄褐色		
29	35	11	094	瓦器	鉢		残 1.1 (4.6)		(内) 10YR4/1 黒灰 10YR6/4 に近い黄褐色 (外) 25Y7/1 灰白 N4-0 灰		

神宮 番号	遺物 番号	図版 番号	遺構・ 位置	種類	部材	法量 () は定数値				色調	備考
						口徑	高さ	底径・ 高台径	その他		
29	36	22	132	瓦器	甕	(14.0)	残42		(内) N4.0 灰 (外) N6.0 灰 N5.0 灰		
29	37	22	132	東播磨 須恵器	鉢	(24.0)	残49		(内) N5.0 灰 (外) N3.0 硝灰		
30	38	15	101	瓦器	甕	16.2	6.0	7.55	(内) N3.0 硝灰 (外) 5Y4/1 灰 7.5YR6.6 橙		
30	39	15	101	瓦器	甕	15.3	5.8	5.5	(内) N4.0 灰 (外) N4.0 灰		
30	40	12	101	瓦器	甕	(16.0)	6.5	7.35	(内) N4.0 灰 (外) 10YR4/1 硝灰		
30	41	12	101	瓦器	甕	(15.2)	5.8	6.8	(内) 10YR4/1 硝灰 (外) N3.0 硝灰 N7.0 灰白		
30	42	15	101	瓦器	甕	(15.8)	5.9		(内) N2.0 黒 N7.0 灰白 (外) N4.0 灰		
30	43	15	101	瓦器	甕	(15.8)	残46		(内) N5.0 灰 N3.0 硝灰 (外) 2.5Y3/1 黒褐		
30	44	12	101	瓦器	甕	(15.4)	残48		(内) 2.5Y3/1 黒褐 (外) 2.5Y5/1 黄灰		
30	45	12	101	瓦器	甕	(15.8)	5.95	(7.7)	(内) 2.5Y5/1 黄灰 (外) N3.0 硝灰		
30	46	15	101	瓦器	甕	(16.0)	6.0	(6.8)	(内) N3.0 硝灰 (外) 5YR6/4 に近い橙		
30	47	12	101	瓦器	甕	(15.0)	残47		(内) 2.5Y3/1 黒褐 (外) N4.0 灰		
30	48	12	101	瓦器	甕	(14.7)	残45		(内) N4.0 灰 (外) 7.5YR6/4 に近い橙		
30	49	12	101	瓦器	甕		残46	(6.0)	(内) 2.5Y8/2 灰白 (外) N4.0 灰		
30	50	12	101	瓦器	甕		残21	(8.0)	(内) N4.0 灰 (外) 10YR5/1 硝灰		
30	51	12	101	瓦器	甕	(7.0)	残17		(内) 7.5YR5/2 灰褐 (外) N4.0 灰		
30	52	15	101	瓦器	甕		残18	7.8	(内) N4.0 灰 (外) N4.0 灰		
30	53	15	101	瓦器	甕		残17	(7.5)	(内) N4.0 灰 (外) 10YR8/1 灰白		
30	54	12	101	瓦器	甕	(9.6)	残26		(内) 10YR8/1 灰白 N4.0 灰 (外) 2.5Y3/1 黒褐		
30	55	12	101	瓦器	甕	(10.0)	2.0		(内) 2.5Y5/1 黄灰 (外) N3.0 硝灰 N6.0 灰		
30	56	12	101	瓦器	甕	(9.6)	2.1		(内) N3.0 硝灰 (外) 5Y4/1 灰		
30	57	12	101	瓦器	甕	(10.0)	2.1		(内) 5Y4/1 灰 (外) N5.0 灰		
30	58	12	101	瓦器	甕	8.85	2.1		(内) N5.0 灰 (外) 5Y7/1 灰白		
31	59	13	101	東播磨 須恵器	鉢	(23.0)	残 (4.25)		(内) 5Y7/1 灰白 (外) 2.5Y6/2 灰黄		
31	60	13	101	東播磨 須恵器	鉢	(30.3)	残2.25		(内) 2.5Y6/2 灰黄 (外) N5.0 灰		
31	61	13	101	東播磨 須恵器	鉢	(29.0)	残4.2		(内) N5.0 灰 (外) N6.0 灰		
31	62	13	101	東播磨 須恵器	鉢	(30.0)	残5.3		(内) N6.0 灰 (外) N8.0 灰白		
31	63	13	101	東播磨 須恵器	鉢		残3.6	(9.4)	(内) N8.0 灰白 (外) N7.0 灰白		
31	64	13	101	須恵器	杯蓋	(12.6)	残1.8		(内) N7.0 灰白 (外) 2.5Y7/1 灰白		
31	65	13	101	須恵器	壺		残4.0		(内) 2.5Y7/1 灰白 (外) N6.0 灰		
31	66	13	101	須恵器	台付壺		残4.6	(7.5)	(内) N5.0 灰 (外) N6.0 灰		
31	67	13	101	須恵器	器台	(26.3)	残1.20		(内) N7.0 灰白 (外) 5Y6/2 灰オリーブ		
31	68	13	101	緑釉陶器	甕		残2.4	(16.0)	(内) 5Y6/2 灰オリーブ (外) 5Y6/2 灰オリーブ (外) 5Y6/2 灰オリーブ		
69	13	101	緑釉陶器	甕					(内) 5Y6/2 灰オリーブ (外) 5Y6/2 灰オリーブ (外) 5Y6/2 灰オリーブ		
70	13	101	青磁	甕					(内) 5Y6/2 灰オリーブ (外) 5Y6/2 灰オリーブ (外) 5Y6/2 灰オリーブ		
31	71	13	101	青磁	甕	(10.6)	残1.5		(内) 5Y6/2 灰オリーブ (外) 5Y7/3 浅黄		
31	72	13	101	白磁	甕	(20.0)	残3.9		(内) 5Y7/3 浅黄 (外) 5Y8/1 灰白		
31	73	13	101	白磁	甕	(16.6)	残2.3		(内) 5Y8/1 灰白 (外) 5Y8/2 灰白		

採回 番号	遺物 番号	図番 番号	遺構・ 層位	種類	群種	法量 0 は復元値				色調	備考
						口径	器高	底径・ 高台径	その他		
31	74	13	101	白磁	碗	(170)	残 3.95		(内) 軸 5Y8/2 灰白 (外) 軸 5Y7/2 灰白		
31	75	13	101	白磁	碗	(160)	残 2.7		(内) 軸 5Y7/2 灰白 (外) 軸 5Y8/1 灰白		
31	76	13	101	白磁	碗	(160)	残 2.3		(内) 軸 5Y8/1 灰白 (外) 軸 5Y8/1 灰白		
	77	13	101	白磁	碗				長 3.6 幅 3.2 (内) 軸 5Y8/1 灰白 (外) 軸 10YR6/2 灰黄褐		
31	78	12	101	土師器	杯	(140)	残 3.4		(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 5YR7/6 橙		
31	79	12	101	土師器	碗	(140)	残 3.3		(内) 5YR7/6 橙 (外) 10YR7/2 に近い黄橙		
31	80	12	101	土師器	碗	(140)	残 3.25		(内) 10YR7/2 に近い黄橙 (外) 10YR8/2 灰白		
31	81	12	101	土師器	皿	(100)	1.35		(内) 10YR8/2 灰白 (外) 10YR6/2 灰黄褐		
31	82	12	101	土師器	皿	(100)	残 1.75		(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 10YR8/2 灰白 2.5YR6/6 橙		
31	83	12	101	土師器	皿	9.6	1.7		(内) 10YR8/2 灰白 2.5YR6/6 橙 (外) 7.5YR8/3 浅黄橙 2.5Y7/1 灰白		
31	84	12	101	土師器	皿	9.4	1.65		(内) 7.5YR8/3 浅黄橙 2.5Y7/1 灰白 (外) 5YR6/6 橙		
31	85	12	101	土師器	皿	(8.8)	残 1.4		(内) 7.5YR7/2 明褐灰 (外) 7.5YR4/2 灰褐		
31	86	12	101	土師器	鉢		残 2.5	(6.2 ~ 6.7)	(内) 10YR4/2 灰黄褐 (外) 10YR6/1 褐灰 10YR7/2 に近い黄橙		
31	87	12	101	土師器	鉢		残 2.5	(9.0)	(内) 10YR5/1 褐灰 (外) 10YR7/2 に近い黄橙		
31	88	13	101	土製品	土鉢				長 5.8 幅 1.8 (内) 2.5Y5/1 黄灰 (外) 10YR4/2 灰黄褐		
31	89	13	101	土師質土器	羽釜	(29.0)	残 8.65		(内) 10YR5/2 灰黄褐 (外) 10YR8/2 灰白 2.5Y5/1 黄灰		
31	90	13	101	土師質土器	羽釜	(28.8)	残 7.25		(内) 10YR8/2 灰白 (外) 7.5YR7/1 明褐灰 7.5YR3/1 黒褐		
31	91	13	101	土師質土器	羽釜	21.9	残 8.0		口径 30.3 (内) 7.5YR6/3 に近い黄 (外) 10YR6/2 灰黄褐		
31	92	13	101	土師質土器	羽釜	(23.0)	残 8.0		(内) 10YR7/2 に近い黄橙 (外) 10YR5/1 褐灰		
31	93	13	101	土師質土器	羽釜	(21.3)	残 7.0		(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 7.5YR6/4 に近い黄 2.5YR6/6 橙		
31	94	13	101	土師質土器	羽釜	(19.2)	残 6.5		口径 (27.4) (内) 5YR7/3 に近い黄 10YR8/1 灰白 (外) 10YR7/2 に近い黄橙 10YR6/1 褐灰		
31	95	13	101	石製品	砥石				長 5.7 幅 6.5 厚 3.8 (内) 10YR7/2 に近い黄橙 10YR6/1 褐灰 (外) N5-0 灰		
32	96	14	101	瓦	平瓦				(内) N5-0 灰 (外) 5Y6/1 灰		
32	97	14	101	瓦	平瓦				(内) N5-0 灰 (外) 2.5Y6/1 黄灰		
32	98	14	101	瓦	平瓦				長 12.0 幅 10.2 (内) 2.5Y6/1 黄灰 (外) 7.5YR6/4 に近い黄 10YR5/1 褐灰		
32	99	14	101	瓦	平瓦				長 14.0 幅 16.2 (内) 10YR7/3 に近い黄橙 (外) 2.5Y5/1 黄灰		
32	100	14	101	瓦	平瓦				長 8.7 幅 10.0 (内) 2.5Y5/1 黄灰 (外) 10YR6/1 褐灰		
32	101	14	101	瓦	丸瓦				長 7.3 幅 8.0 高 7.0 (内) 10YR6/1 褐灰 (外) N3-0 暗灰		
33	102	15	101	瓦器	碗	15.25	6.0	6.75	(内) N2-0 黒 (外) N4-0 灰		
33	103	15	101	瓦器	碗	15.8	6.2	6.5	(内) N4-0 灰 (外) N2-0 黒 N6-0 灰		
33	104	15	101	瓦器	碗	16.5	5.75	6.5	(内) N2-0 黒 2.5Y7/2 灰黄 (外) N3-0 暗灰		
33	105	15	101	瓦器	碗	(16.2)	6.0	7.2	(内) N3-0 暗灰 (外) N3-0 暗灰		
33	106	15	101	瓦器	碗	(15.2)	6.2	7.0	(内) N3-0 暗灰 7.5YR3/3 暗褐 (外) N2-0 黒		
33	107	16	101	瓦器	碗	(15.8)	5.6	(5.5)	(内) N3-0 暗灰 N4-0 灰 (外) N4-0 灰		
33	108	16	101	瓦器	碗	(15.1)	5.9	(7.4)	(内) N5-0 灰 (外) 10YR2/1 黒 2.5Y7/1 灰白		
33	109	16	101	瓦器	碗	(16.0)	(6.3)	(7.2)	(内) 10Y2/1 黒 10YR4/4 褐 (外) N3-0 暗灰 7.5YR5/4 に近い黄		
33	110	15	101	瓦器	碗	(15.8)	5.8	7.0	(内) N4-0 灰 (外) N5-0 灰		

神田 番号	遺物 番号	図版 番号	遺構・ 位置	種類	部材	法量 () は単位値				色調	備考
						口徑	高さ	底径・ 高台径	その他		
33	111	16	101	瓦器	碗	(16.0)	5.55	(7.0)	(内) N5.0 灰 (外) 5Y5.1 灰		
33	112	16	101	瓦器	碗	(16.0)	残49		(内) 5Y4.2 灰オリーブ (外) 2.5Y8.1 灰白		
33	113	15	101	瓦器	碗	(15.4)	残51		(内) N4.0 灰 10YR7.1 灰白 (外) 2.5Y4.1 黄灰		
33	114	16	101	瓦器	碗	(15.8)	残46		(内) 2.5Y8.1 灰白 (外) N4.0 灰		
34	115	16	101	瓦器	碗		残17	7.2	(内) N5.0 灰 (外) 2.5Y8.2 灰白		
34	116	15	101	瓦器	碗		残14	6.3	(内) N4.0 灰 2.5Y7.3 浅黄 (外) 5Y4.1 灰		
34	117	16	101	瓦器	碗		残26	(6.4)	(内) 5Y3.1 オリーブ黒 (外) 2.5Y7.1 灰白 N5.0 灰		
34	118	15	101	瓦器	碗		残31	(6.6)	(内) 2.5Y7.1 灰白 5Y5.1 灰 (外) N4.0 灰		
34	119	15	101	瓦器	碗		残17	6.6	(内) N4.0 灰 (外) N4.0 灰		
34	120	16	101	瓦器	碗		残24	7.5	(内) N5.0 灰 (外) 2.5Y4.1 黄灰 2.5Y6.1 黄灰		
34	121	16	101	瓦器	碗		残315	6.4	(内) 2.5Y4.1 黄灰 2.5YR5.6 明褐 (外) 2.5Y6.2 灰黄 5Y4.1 灰		
34	122	15	101	瓦器	碗		残14	(7.0)	(内) 2.5Y6.2 灰黄 (外) 10YR3.1 黒褐		
34	123	15	101	瓦器	碗		残20	6.8	(内) 5Y4.1 灰 (外) N4.0 灰		
34	124	15	101	瓦器	碗		残14	7.1	(内) N4.0 灰 (外) 2.5Y8.1 灰白 N4.0 灰		
34	125	16	101	瓦器	碗		残3.5	7.8	(内) 2.5Y8.1 灰白 N4.0 灰 (外) 2.5Y3.1 黒褐		
34	126	15	101	瓦器	碗		残3.0	(6.5)	(内) 10YR4.2 灰黄褐 (外) 2.5Y8.1 灰白		
34	127	15	101	瓦器	碗		残17	6.5	(内) 2.5Y3.1 黒褐 (外) 2.5Y4.1 黄灰 10YR5.3 に近い黄褐		
34	128	16	101	瓦器	碗		残3.1	5.85	(内) 10YR5.1 褐灰 10YR5.3 に近い黄褐 (外) 5Y4.1 灰		
34	129	15	101	瓦器	碗		残1.25	5.25	(内) N4.0 灰 (外) N4.0 灰		
34	130	15	101	瓦器	碗		残1.3	6.05	(内) N4.0 灰 (外) N4.0 灰		
34	131	15	101	瓦器	碗		残1.5	(6.0)	(内) N4.0 灰 (外) N4.0 灰		
34	132	15	101	瓦器	碗		残2.7	(6.0)	(内) N4.0 灰 (外) N5.0 灰		
34	133	16	101	瓦器	碗		残1.8	4.7	(内) N4.0 灰 2.5YR6.4 に近い橙 (外) N5.0 灰 2.5YR6.6 橙		
34	134	16	101	瓦器	碗	(14.6)	4.5		(内) 10YR4.1 褐灰 (外) N4.0 灰		
34	135	16	101	瓦器	皿	(10.0)	残1.8		(内) N4.0 灰 (外) N3.0 暗灰 2.5Y6.3 に近い黄		
34	136	16	101	瓦器	皿	(10.0)	2.2		(内) N3.0 暗灰 10YR6.3 に近い黄橙 (外) 5Y3.1 オリーブ黒 10YR5.4 に近い黄褐		
34	137	16	101	瓦器	皿	(10.0)	2.3		(内) 5Y4.1 灰 (外) N3.0 暗灰		
34	138	16	101	瓦器	皿	(9.0)	残1.8		(内) N3.0 暗灰 (外) N4.0 灰		
34	139	15	101	瓦器	鉢		残3.1	11.6	(内) N4.0 灰 (外) 10YR6.1 褐灰 10YR8.1 灰白 N2.0 黒		
34	140	17	101	瓦器	鉢		残11.3	(10.0)	(内) N2.0 黒 (外) 10YR8.3 浅黄橙 10YR7.6 明黄褐		
35	141	17	101	土師器	皿	(16.1)	残3.4		(内) 10YR8.3 浅黄橙 (外) 10YR8.2 灰白		
35	142	17	101	土師器	皿	(15.6)	残2.5		(内) 10YR8.2 灰白 (外) 2.5Y7.2 灰黄 2.5Y7.1 灰白		
35	143	17	101	土師器	皿	(15.8)	残2.9		(内) 2.5Y7.2 灰黄 2.5Y7.1 灰白 (外) 10YR7.2 に近い黄橙		
35	144	17	101	土師器	皿	(14.4)	残3.9		(内) 10YR6.2 灰黄褐 (外) 10YR8.3 浅黄橙		
35	145	17	101	土師器	皿	(13.7)	残2.9		(内) 10YR8.3 浅黄橙 (外) 10YR7.2 に近い黄橙		
35	146	17	101	土師器	皿	(11.8)	残2.8		(内) 10YR7.2 に近い黄橙 (外) 2.5YR7.4 に近い橙		
35	147	17	101	土師器	皿	(9.6)	1.2		(内) 2.5YR7.4 に近い橙 (外) 10YR7.2 に近い黄橙		
35	148	17	101	土師器	皿	10.2	1.6		(内) 10YR7.2 に近い黄橙 (外) 10YR7.2 に近い黄橙		

押出 番号	造物 番号	図番 番号	造物・ 部位	種類	群種	法量 0 は復元値				色調	備考
						口径	器高	底径・ 高台径	その他		
35	149	17	101	土師器	皿	(8.8)	残 1.6		(内) 10YR7/2 にぶい黄橙 (外) 2.5Y8/2 灰白		
35	150	17	101	土師器	皿	(9.0)	残 1.3		(内) 2.5Y8/2 灰白 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙		
35	151	17	101	土師器	皿	(8.0)	残 1.7		(内) 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 2.5Y7/2 灰黄		
35	152	17	101	土師器	皿	(8.0)	残 1.5		(内) 2.5Y7/2 灰黄 (外) 7.5YR7/4 にぶい橙		
35	153	17	101	土師器	皿	(8.2)	1.6		(内) 7.5YR7/4 にぶい橙 (外) 2.5Y8/2 灰白		
35	154	17	101	土師器	皿	(10.8)	1.9		(内) 2.5Y8/2 灰白 (外) 2.5Y8/3 淡黄 10YR6/3 にぶい黄橙		
35	155	17	101	土師器	皿	(10.1)	1.4		(内) 2.5Y8/2 灰白 2.5Y5/1 黄灰 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙		
35	156	17	101	土師器	皿	(10.0)	残 1.6		(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 10YR8/1 灰白		
35	157	17	101	土師器	皿	(9.8)	1.2		(内) 10YR8/1 灰白 (外) 10YR8/3 浅黄橙		
35	158	17	101	土師器	皿	(9.6)	残 1.7		(内) 10YR8/3 浅黄橙 (外) 7.5YR6/6 橙		
35	159	17	101	土師器	皿	(9.2)	残 1.5		(内) 7.5YR8/4 浅黄橙 (外) 10YR7/2 にぶい黄橙 10YR5/2 灰黄褐		
35	160	17	101	土師器	皿	(8.6)	1.5		(内) 10YR8/2 灰白 (外) 10YR8/2 灰白		
35	161	17	101	土師器	皿	(9.0)	残 1.75		(内) 10YR8/2 灰白 (外) 10YR8/2 灰白 5YR6/6 橙		
35	162	17	101	土師器	皿	(10.0)	1.5		(内) 10YR8/2 灰白 5YR8/3 淡橙 (外) 2.5Y7/2 灰黄		
35	163	17	101	土師器	皿/杯		残 3.75	基部径 4.4	(内) 2.5Y7/2 灰黄 (外) 2.5Y8/1 灰白		
35	164	17	101	土師器	皿/杯		残 2.3	基部径 4.65	(内) 2.5Y8/1 灰白 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙		
35	165	17	101	土師器	皿/杯		残 2.0	(5.6)	(内) 5YR4/6 赤褐 10YR5/4 にぶい黄褐 (外) 2.5Y8/2 灰白		
35	166	17	101	土師器	皿/杯		残 4.2	脚底径 (6.0)	(内) 2.5Y8/2 灰白 (外) 10YR6/2 灰黄褐		
35	167	17	101	土師器	高杯		残 4.5		(内) 2.5Y7/2 灰黄 (外) 10YR2/1 黒褐 5YR6/4 にぶい橙		
35	168	17	101	黒色土器	碗	(22.8)	残 4.2		(内) 10YR2/1 黒 (外) 2.5Y6/1 黄灰		
35	169	16	101	須恵器	杯	(15.0)	残 3.55		(内) 2.5Y6/1 黄灰 (外) 2.5Y8/2 灰白		
35	170	16	101	須恵器	杯		残 2.7	(11.1)	(内) 2.5Y6/2 灰黄 (外) N6/0 灰		
35	171	13	101	須恵器	杯		残 1.9	(15.3)	(内) 7.5Y6/1 灰 (外) N6/0 灰		
35	172	13	101	東播磨 須恵器	鉢	(31.8)	残 4.5		(内) N6/0 灰 (外) 2.5Y5/1 黄灰 2.5Y7/1 灰白 2.5Y4/1 黄灰		
35	173	16	101	東播磨 須恵器	鉢	(29.5)	残 4.6		(内) 10YR5/1 褐灰 (外) 2.5Y6/1 黄灰		
35	174	16	101	東播磨 須恵器	鉢	(38.0)	残 4.7		(内) 2.5Y7/1 灰白 (外) N8/0 灰白		
35	175	16	101	須恵器	壺	(40.0)	残 9.5	頸部径 (30.0)	(内) N6/0 灰 N5/0 灰 (外) 2.5Y8/1 灰白		
35	176	16	101	白磁	碗	(14.6)	残 4.5		(内) 釉) 2.5Y8/1 灰白 (外) 釉) 2.5Y8/1 灰白		
35	177	16	101	白磁	碗			長 3.5 幅 3.6	(内) 釉) 2.5Y8/1 灰白 (外) 釉) 5YR8/1 灰白		
35	178	16	101	白磁	碗	(16.2)	残 2.8		(内) 釉) 5YR8/1 灰白 (外) 釉) 5YR8/1 灰白		
35	179	16	101	白磁	碗	(15.6)	残 2.5		(内) 釉) 5YR8/1 灰白 (外) 釉) 5Y6/2 灰オリーブ		
35	180	16	101	緑釉陶器	碗			長 4.8 幅 5.5	(内) 5Y6/2 灰オリーブ (外) 釉) 7.5Y3/3 1 暗緑灰		
35	181	16	101	須恵器	壺	(11.8)	残 2.6		(内) 2.5Y5/1 黄灰 10Y4/1 灰 (外) 2.5Y6/1 黄灰		
35	182	18	101	須恵器	壺		残 2.20	11.3	(内) 2.5Y6/1 黄灰 (外) 10YR4/2 灰黄褐 7.5YR4/2 灰褐		
36	183	18	101	土師質土器	羽釜	(23.6)	残 6.5	肩径 (28.0)	(内) 10YR4/2 灰黄褐 7.5YR4/2 灰褐 (外) 7.5YR2/1 黒褐 7.5YR2/1 黒		
36	184	18	101	土師質土器	羽釜	(22.4)	残 9.9	肩径 (30.0)	(内) 7.5YR4/2 灰褐 7.5YR3/1 黒褐 (外) 10YR6/2 灰黄褐		
36	185	18	101	土師質土器	羽釜	(26.0)	残 9.1	肩径 (33.0)	(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 10YR6/2 灰黄褐		
36	186	18	101	土師質土器	羽釜	(26.0)	残 7.0	肩径 (31.2)	(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 10YR5/2 灰黄褐 10YR7/2 にぶい黄橙		

棟号 番号	建物 番号	図面 番号	通称・ 部位	種類	部材	法量 () は定価				色調	備考
						口徑	高さ	底径・ 高台径	その他		
36	187	18	101	土師質土器	羽釜	(23.4)	残 13.7		(内) 10YR4/2 灰黄褐 10YR7/2 に近い黄橙 (外) 10YR6/2 灰黄褐		
36	188	18	101	土師質土器	羽釜	(29.4)	残 10.9		跨径 (36.0) (内) 7.5YR3/1 黒褐 (外) 2.5Y7/2 灰黄		
36	189	18	101	土師質土器	羽釜	(23.6)	残 8.1		(内) 2.5Y7/2 灰黄 (外) 10YR5/2 灰黄褐		
36	190	18	101	土師質土器	羽釜	(21.8)	残 7.3		跨径 (28.0) (内) 10YR5/2 灰黄褐 (外) 7.5YR4/1 褐灰 7.5YR3/1 黒褐		
36	191	18	101	土師質土器	羽釜	(20.8)	残 7.2		(内) 7.5YR4/1 褐灰 7.5YR7/2 明褐灰 (外) 10YR7/2 に近い黄橙 10YR6/2 灰黄褐		
36	192	18	101	土師質土器	羽釜	(25.4)	残 7.2		跨径 (30.0) (内) 10YR7/2 に近い黄橙 10YR6/2 灰黄褐 (外) 5YR5/4 に近い赤褐 10YR7/3 に近い黄橙		
36	193	18	101	土師質土器	羽釜	(28.0)	残 8.1		跨径 (33.8) (内) 10YR7/3 に近い黄橙 (外) 10YR6/2 灰黄褐 5YR5/6 明赤褐 7.5YR3/1 黒褐		
36	194	18	101	土師質土器	羽釜	(26.0)	残 7.2		(内) 10YR6/2 灰黄褐 7.5YR4/1 褐灰 (外) 7.5YR6/1 褐灰		
36	195	18	101	土師質土器	羽釜		残 7.2		(内) 7.5YR5/4 に近い褐 7.5YR4/1 褐灰 (外) 7.5YR7/4 に近い橙 10YR6/2 灰黄褐		
36	196	18	101	土師器	甕	(29.0)	残 5.8		(内) 2.5Y7/1 灰白 10YR4/1 褐灰 (外) 5YR7/4 に近い橙		
37	197	19	119 上層	瓦器	碗	(16.5)	5.8	(7.4)	(内) N3.0 褐灰 7.5YR7/3 に近い橙 (外) N5.0 灰		
37	198	19	119 上層	瓦器	碗	(16.0)	5.25		(内) N5.0 灰 (外) N5.0 灰		
37	199	19	119 上層	瓦器	碗	(15.0)	6.0		(内) N5.0 灰 (外) N4.0 灰		
37	200	19	119 上層	瓦器	碗	15.5	5.5		(内) N4.0 灰 (外) N5.0 灰		
37	201	19	119 上層	瓦器	皿	(11.0)	2.0		(内) N5.0 灰 (外) 7.5YR7/4 に近い橙		
37	202	20	119 上層	土師器	皿	(14.0)	残 2.6		(内) 10YR8/2 灰白 (外) 10YR6/1 褐灰		
37	203	20	119 上層	土師器	皿	(10.6)	1.9		(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 7.5YR 8.4 浅黄橙		
37	204	20	119 上層	土師器	皿	(9.6)	残 1.3		(内) 7.5YR 8.4 浅黄橙 (外) 10YR8/2 灰白		
37	205	20	119 上層	土師器	皿	(9.8)	残 1.6		(内) 10YR8/3 浅黄橙 (外) 5YR8/1 灰白 5YR8/3 淡橙		
37	206	20	119 上層	土師器	皿	(10.0)	残 1.4		(内) 7.5YR8/3 浅黄橙 (外) 2.5Y4/1 黄灰 10YR6/2 灰黄褐		
37	207	20	119 上層	土師器	皿		残 1.6	4.8	(内) 2.5Y4/1 黄灰 10YR6/2 灰黄褐 (外) 5Y7/1 灰白		
37	208	20	119 上層	白磁	碗	(15.6)	残 5.1		(内) 釉) 5Y7/1 灰白 (外) 釉) 2.5Y7/3 浅黄 2.5Y5/1 黄灰		
37	209	20	119 上層	土製品	土鐏				長 46 幅 21 (内) 2.5Y7/3 浅黄 (外) N3.0 褐灰		
37	210	19	119 下層	瓦器	碗	(16.3)	5.95	7.0	(内) N3.0 褐灰 (外) N3.0 褐灰 10YR7/1 灰白		
37	211	19	119 下層	瓦器	碗	15.8	6.5	6.8	(内) N3.0 褐灰 10YR4/1 褐灰 (外) N3.0 褐灰 7.5YR/1 灰白		
37	212	19	119 下層	瓦器	碗	(15.8)	5.1	(6.6)	(内) N3.0 褐灰 5Y7/1 灰白 (外) 5Y3/1 灰		
37	213	19	119 下層	瓦器	碗	(15.6)	6.8		(内) 5Y3/1 灰 (外) 5Y6/1 灰		
37	214	19	119 下層	瓦器	碗	(15.6)	5.4		(内) 5Y6/1 灰 (外) 10YR8/3 浅黄橙		
37	215	19	119 下層	瓦器	碗	(15.5)	5.9	7.4	(内) 10YR8/2 灰白 (外) N5.0 灰		
37	216	19	119 下層	瓦器	皿	(11.0)	2.5		(内) N6.0 灰 (外) N4.0 灰		
37	217	19	119 下層	瓦器	皿	(11.0)	2.6		(内) N4.0 灰 (外) N4.0 灰		
37	218	19	119 下層	瓦器	皿	(10.6)	2.7		(内) N4.0 灰 (外) N4.0 灰		
37	219	19	119 下層	瓦器	皿	9.9	2.65		(内) N4.0 灰 (外) 10YR7/2 に近い黄橙		
37	220	20	119 下層	土師器	皿	(16.0)	残 2.9		(内) 10YR7/1 灰白 (外) 2.5YR6-8 橙		
37	221	20	119 下層	土師器	皿	(16.0)	残 3.1		(内) 10YR7/2 に近い黄橙 (外) 7.5YR7/4 に近い橙		
37	222	20	119 下層	土師器	皿	(15.8)	残 2.9		(内) 7.5YR5/3 に近い褐 (外) 5YR8/3 淡橙 5YR8/2 灰白		
37	223	20	119 下層	土師器	皿	(10.2)	残 1.7		(内) 5YR8/3 淡橙 5YR8/2 灰白 (外) 10YR8/2 灰白		
37	224	20	119 下層	土師器	皿	(9.8)	残 1.6		(内) 10YR8/3 浅黄橙 (外) 10YR8/3 浅黄橙		

棟号	連号	図面	連号・	種類	群種	注 意 点				色調	備考
						口徑	器高	底径・	その他		
37	225	20	119 下層	土師器	皿	(9.4)	1.8		(内) 5YR7/4 に近い (外) 7.5YR7/1 灰白		
37	226	20	119 下層	白磁	碗	(20.0)	残 3.9		(内) 軸) 7.5Y7/1 灰白 (外) 軸) 10YR7/2 に近い黄緑 2.5Y3/1 黒褐		
37	227	20	119 下層	土師質土器	羽釜	(29.6)	残 6.7		(内) 10YR6/2 灰黄褐 (外) 10YR6/3 に近い黄緑 10YR4/1 褐灰		
37	228	20	119 下層	土師質土器	羽釜	(30.0)	残 5.9		(内) 10YR6/3 に近い黄緑 10YR4/1 褐灰 (外) 10YR8/1 灰白 10YR6/2 灰黄褐		
38	229	19	119	瓦器	碗	(15.4)	5.7	6.7	(内) N3.0 暗灰 2.5Y8/1 灰白 (外) 5Y5/1 灰		
38	230	19	119	瓦器	碗	(15.3)	5.85		(内) 5Y5/1 灰 (外) N5.0 灰		
38	231	19	119	瓦器	碗	(16.7)	5.4		(内) N5.0 灰 (外) N5.0 灰		
38	232	19	119	瓦器	碗	(16.0)	6.1		(内) N5.0 灰 (外) N5.0 灰		
38	233	19	119	瓦器	碗	(16.4)	6.0		(内) N5.0 灰 (外) 10YR8/3 浅黄緑		
38	234	20	119	瓦器	碗	(17.0)	残 4.8		(内) 2.5Y8/1 灰白 (外) 7.5YR 7/6 灰		
38	235	20	119	瓦器	碗		残 2.6	(7.0)	(内) 2.5Y4/1 黄灰 (外) N4.0 灰		
38	236	19	119	瓦器	皿	(10.0)	1.8		(内) N4.0 灰 (外) 5Y7/1 灰白		
38	237	19	119	瓦器	皿	(8.8)	2.4		(内) 5Y7/1 灰白 (外) N4.0 灰		
38	238	19	119	瓦器	皿	(10.0)	2.2		(内) 2.5Y6/1 黄灰 (外) 10YR8/2 灰白		
38	239	20	119	土師器	鉢	(15.0)	残 2.9		(内) 10YR8/2 灰白 (外) 5YR7/3 に近い黄緑 10YR4/1 褐灰		
38	240	20	119	土師器	碗	(14.2)	3.4	6.8	(内) 10YR3/1 黒褐 10YR7/1 灰白 (外) 10YR8/2 灰白		
38	241	20	119	土師器	皿	(10.6)	残 1.5		(内) 10YR8/2 灰白 (外) 10YR5/2 灰黄褐		
38	242	20	119	土師器	皿	(10.0)	残 1.4		(内) 7.5YR5/2 灰褐 (外) 10YR8/2 灰白		
38	243	20	119	土師器	皿	(9.2)	1.7		(内) 10YR8/2 灰白 (外) 10YR8/2 灰白		
38	244	20	119	土師器	皿	9.2	1.7		(内) 10YR8/2 灰白 (外) 7.5YR7/4 に近い黄		
38	245	20	119	土師器	皿	(9.2)	残 1.8		(内) 2.5Y7/3 浅黄 (外) 5YR7/6 橙		
38	246	20	119	土師器	皿	(9.0)	残 1.3		(内) 7.5YR 8/3 浅黄緑 (外) 7.5YR5/1 褐灰 7.5YR6/4 に近い黄		
38	247	20	119	土師質土器	羽釜	(28.0)	残 12.4		(内) 10YR7/3 に近い黄緑 10YR4/1 褐灰 (外) 7.5YR5/6 明赤褐 5Y3/1 オリーブ黒	同様 (33.4)	
39	248	21	157	瓦器	碗	(15.8)	残 4.3		(内) 5Y3/1 オリーブ黒 (外) 2.5YR7/1 明赤灰 N4.0 灰		
39	249	21	157	瓦器	碗	(15.9)	残 4.7		(内) N7.0 灰白 N5.0 灰 (外) N7.0 灰白 N5.0 灰 N3.0 暗灰		
39	250	21	157	瓦器	碗		残 2.2	7.35	(内) N3.0 暗灰 (外) N4.0 灰		
39	251	21	157	瓦器	碗		残 3.1	(6.6)	(内) N4.0 灰 (外) N4.0 灰		
39	252	21	157	瓦器	碗		残 2.3	(5.8)	(内) N3.0 暗灰 (外) 7.5YR8/2 灰白 5YR8/3 淡緑		
39	253	21	157	瓦器	碗		残 1.5	(6.2)	(内) 10YR8/1 灰白 (外) 7.5YR7/4 に近い黄		
39	254	21	157	土師質土器	羽釜	(19.0)	6.5		(内) 7.5YR7/2 明赤灰 7.5YR2/1 黒 (外) 10YR6/4 に近い黄緑	同様 (25.6)	
39	255	21	157	土師器	鉢	(23.1)	残 2.4		(内) 10YR6/6 明赤褐 (外) 10YR8/3 浅黄緑 10YR7/1 灰白		
39	256	22	183	土師器	皿	(15.0)	残 2.65		(内) 10YR8/2 灰白 (外) 2.5Y8/3 淡黄 7.5YR8/3 浅黄緑		
39	257	22	183	土師器	皿	(9.6)	1.35		(内) 2.5Y8/3 淡黄 (外) 10YR6/1 褐灰 10YR4/1 褐灰 5YR6/8 橙		
39	258	22	183	土師質土器	羽釜		残 5.4		(内) 10YR6/2 灰黄褐 10YR4/1 褐灰 (外) N3.0 暗灰 N5.0 灰	同様 (36.0)	
39	259	21	189	瓦器	碗	(13.5)	5.5	(5.0)	(内) N4.0 灰 N5.0 灰 (外) N4.0 灰		
39	260	21	189	瓦器	碗		残 2.4	(5.0)	(内) N5.0 灰 7.5YR5/4 に近い黄 (外) 2.5Y7/1 灰白 10YR4/2 灰黄褐		
39	261	21	189	土師質土器	羽釜	(27.8)	残 7.0		(内) 5YR6/6 橙 (外) N3.0 暗灰		

神田 番号	遺物 番号	図番 番号	遺構・ 層位	種類	部材	法量 () は定元値				色調	備考
						口徑	高さ	底径・ 高台径	その他		
39	262	11	188	瓦器	皿	(9.8)	2.7	(4.6)	(内) N4/0 灰 (外) 2.5Y2/1 黒 10YR4/1 褐灰 7.5YR6/6 橙		
39	263	22	190	瓦器	皿	(10.4)	残.22		(内) 2.5Y2/1 黒 10YR4/1 褐灰 7.5YR6/6 橙 (外) 10YR8/2 灰白 5YR8/2 灰白		
39	264	22	190	土師器	皿	(9.9)	1.2		(内) 10YR8/2 灰白 5YR8/2 灰白 (外) 5Y4/1 灰 2.5Y3/1 黒褐		
39	265	22	190	瓦器	碗	(15.2)	5.4	(6.8)	(内) 2.5Y4/1 黄灰 (外) 2.5Y4/1 黄灰 付着物：7.5YR5/6 明褐		
39	266	22	190	瓦器	碗	(16.0)	残.49		(内) 2.5Y4/1 黄灰 付着物：7.5YR5/6 明褐 (外) 5Y6/1 灰		
39	267	22	190	瓦器	碗	(15.0)	残.49		(内) 2.5Y4/1 黄灰 (外) 5Y4/1 灰		
39	268	22	190	瓦器	碗	(12.8)	残.42		(内) 5Y5/1 灰 (外) 5Y4/1 灰		
39	269	22	190	瓦器	碗		残.18	7.0	(内) 5Y5/1 灰 (外) 10YR6/6 明黄褐 10YR4/1 褐灰		
39	270	22	190	瓦器	碗		残.21	7.65	(内) 2.5Y4/1 黄灰 (外) 10YR6/1 褐灰 10YR7/2 にぶい黄橙		
39	271	22	190	須恵器	高杯		残.5.5	(9.0)	(内) N6/0 灰 杯部：5Y7/1 灰白 (外) 2.5Y3/2 黒褐		
39	272	22	190	土師器	皿	(15.6)	残.23		(内) 10YR7/1 灰白 付着物：7.5YR6/8 橙 (外) 10YR7/4 にぶい黄橙		
39	273	22	190	土師器	甕	(18.4)	残.47		(内) 10YR8/3 浅黄橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙 付着物：7.5YR6/8 橙		
39	274	22	190	土師器	甕	(16.9)	残.39		(内) 2.5Y7/3 浅黄 (外) 10YR7/3 にぶい黄橙		
40	275	21	127	陶器	碗		残.1.9	3.5	(内) 軸) 5Y7/2 灰白 5Y6/2 灰オリーブ (外) N3/0 暗灰 N7/0 灰白		
40	276	21	127	瓦器	皿	(8.7)	1.9		(内) N3/0 暗灰 N8/0 灰白 (外) N3/0 暗灰 N8/0 灰白		
	277	21	127	鉋澤					底 5.4 幅 5.3 厚 6.5		
40	278	11	138	陶器	碗		残.25	(3.8)	(内) 軸) 5Y6/2 灰オリーブ (外) 10YR6/4 にぶい黄橙		
40	279	11	139	瓦器	碗	(15.8)	残.39		(内) 10YR5/4 にぶい黄褐 (外) 7.5YR 7/4 にぶい橙		
40	280		表探	縄文土器	深鉢	(17.8)	残.6.2		(内) 10YR8/4 浅黄橙 (外) 10YR8/4 浅黄橙		

圖 版

北壁 西端
第1層～第10層
南から



北壁 中央
第1層～第6層
南から



北壁 東端
第1層～第10層
南から





212 流路
全景
南西から



212 流路
断面
北から



掘立柱建物 1
全景
南から



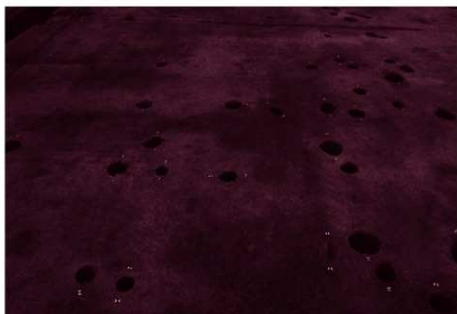
掘立柱建物2
全景
南から



029 柱穴
土師質土器出土状況
北から



073 柱穴
断面
西から



掘立柱建物 3
全景
南から



掘立柱建物 4
全景
南から



030 柱穴
断面
南西から



掘立柱建物 5
全景
東から



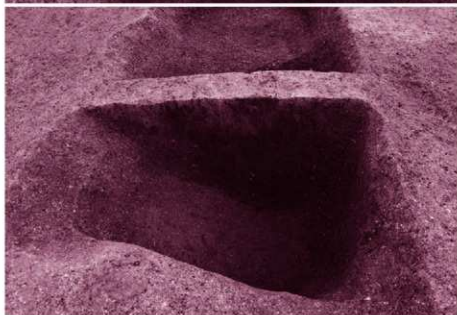
掘立柱建物 6
全景
東から



135 溝
土器出土状況
北西から



021 柱穴
断面
西から



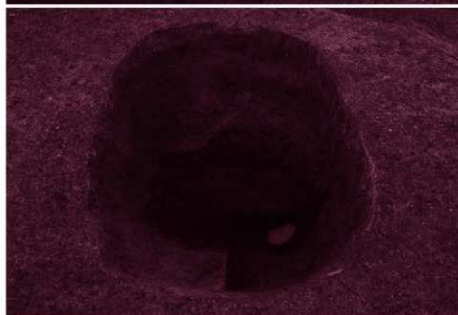
091 土坑
断面
西から



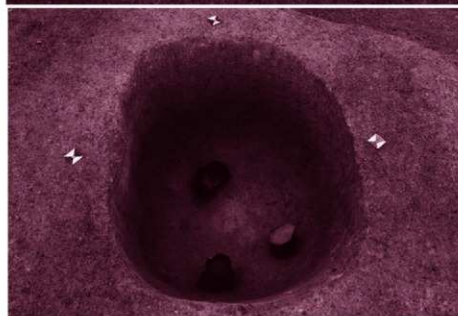
080 土坑
断面
南から



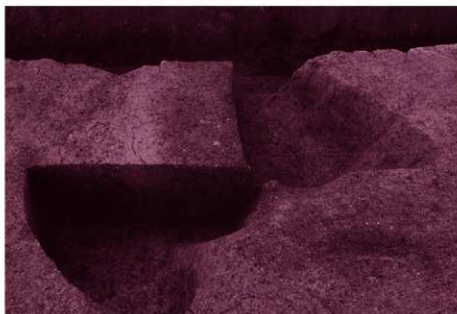
137 土坑
断面
南から



102 土坑
炭出土状況
東から



102 土坑
遺物出土状況
東から



016 土坑状変形
断面
東から



005・094 溝
全景
南から



101 溝
全景
西から

190 溝
全景
北東から



101・190 溝
断面①
西から



101・190 溝
断面②
北西から





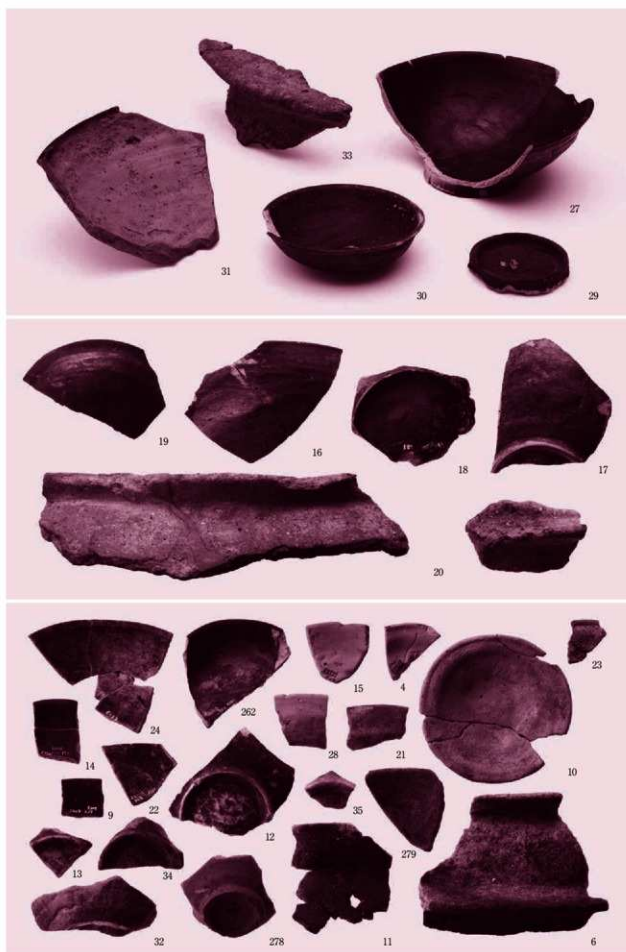
002 土坑
断面
東から



099 土坑
全景
南から



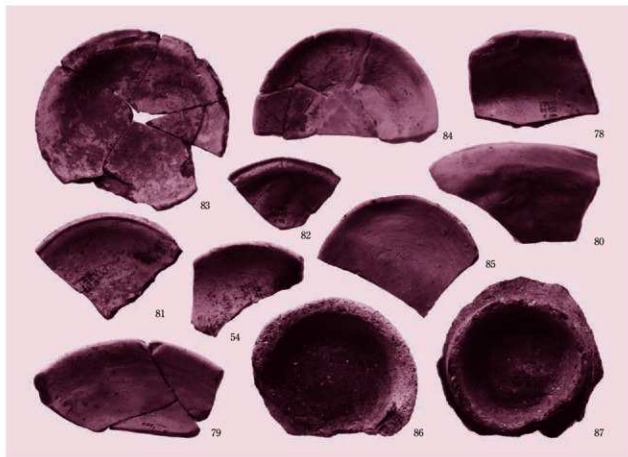
127 土坑
断面
北から



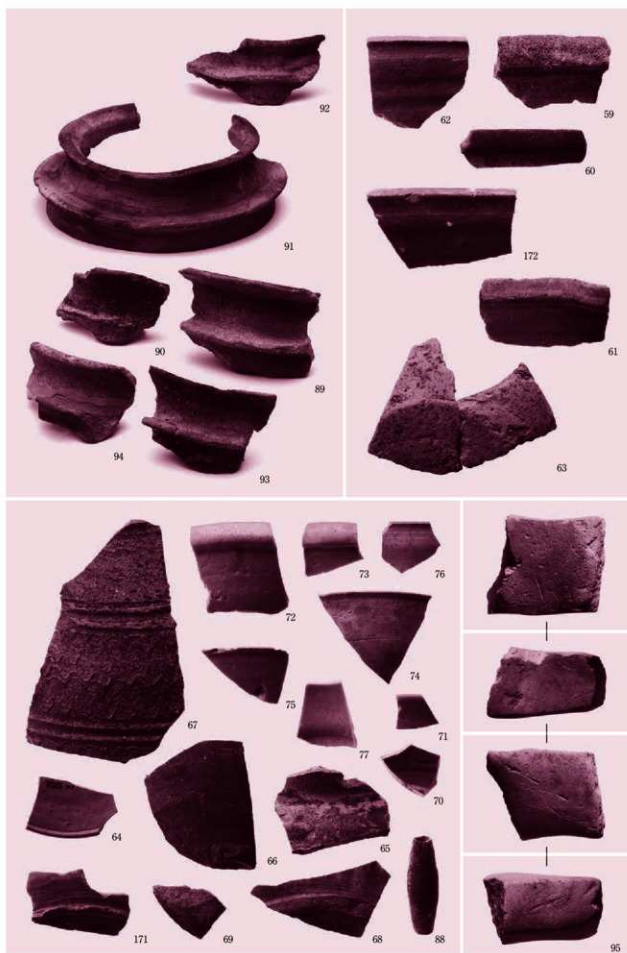
瓦器（碗・皿）・土師器（皿・鍋）・須恵器（鉢）・土師質土器（羽釜）・青磁（碗）・陶器（碗）



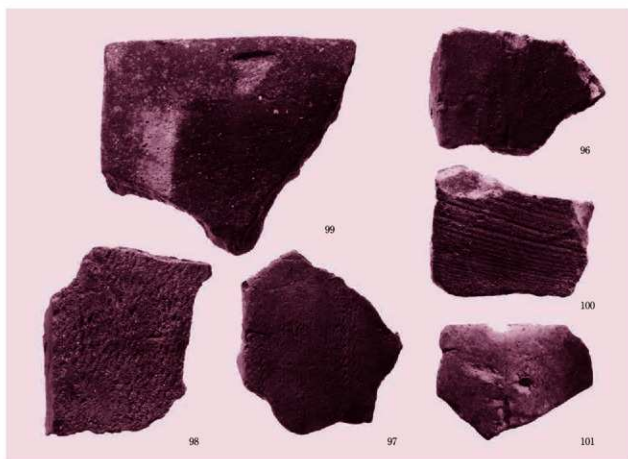
1. 瓦器 (碗・皿)



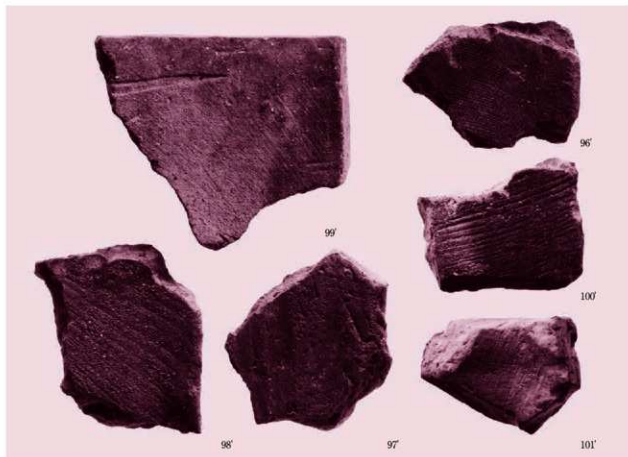
2. 瓦器 (皿)・土師器 (杯・碗・皿・鉢)



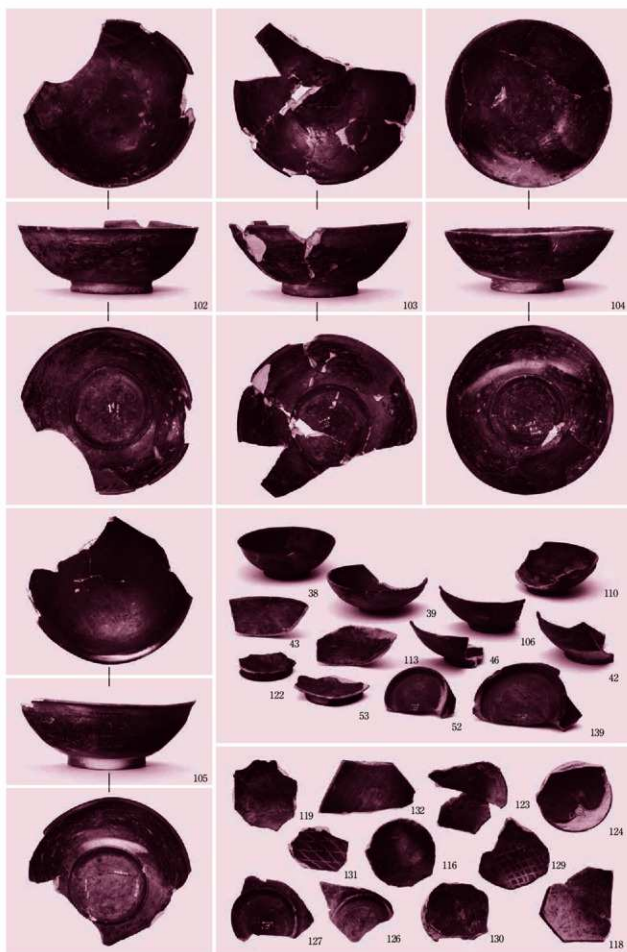
土師器(甕)・須恵器(杯・杯蓋・壺・台付壺・器台・鉢)・土師質土器(羽釜)・緑釉陶器(碗)・青磁(碗・皿)・白磁(碗)・土製品(土鍾)・石製品(砥石)



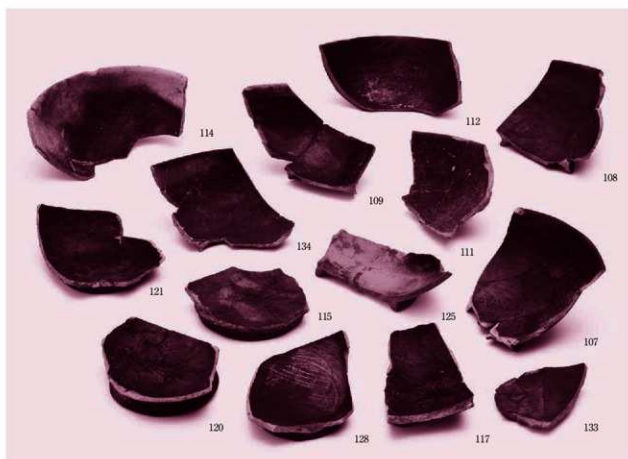
1. 瓦(平瓦・丸瓦)凸面



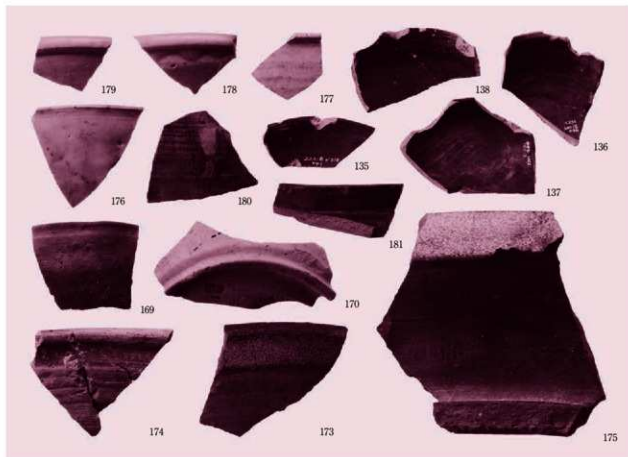
2. 瓦(平瓦・丸瓦)凹面



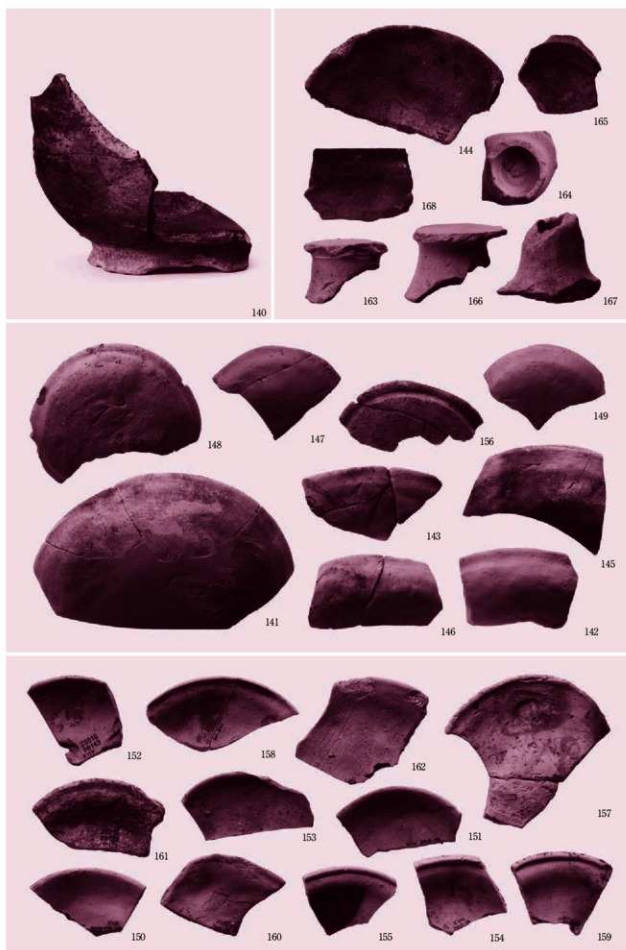
瓦器 (碗・鉢)



1. 瓦器(碗)



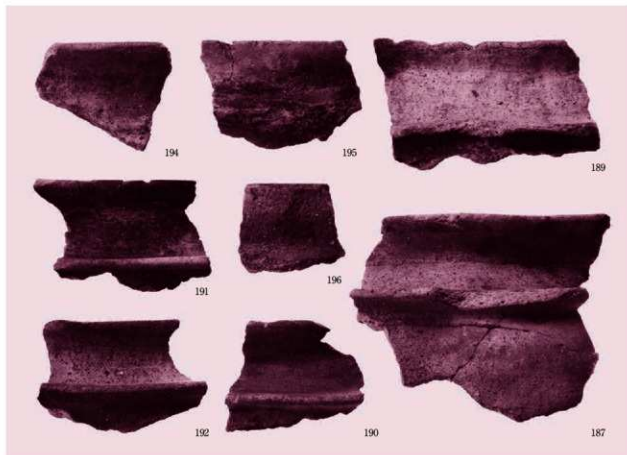
2. 瓦器(皿)・須恵器(杯・壺・甕・鉢)・緑釉陶器(碗)・白磁(碗)



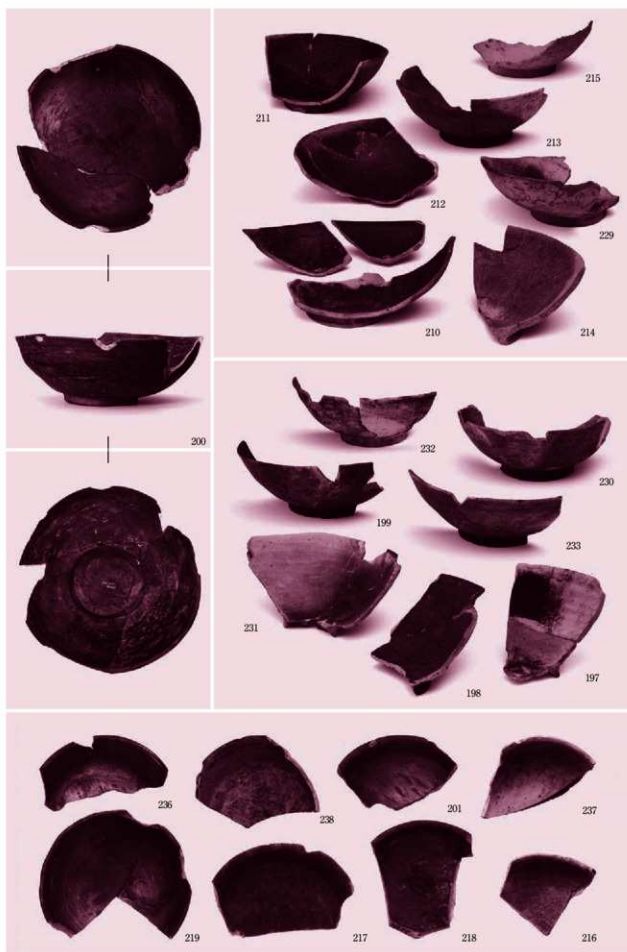
瓦器(鉢)・土師器(皿・皿/杯・高杯)・黒色土器(碗)



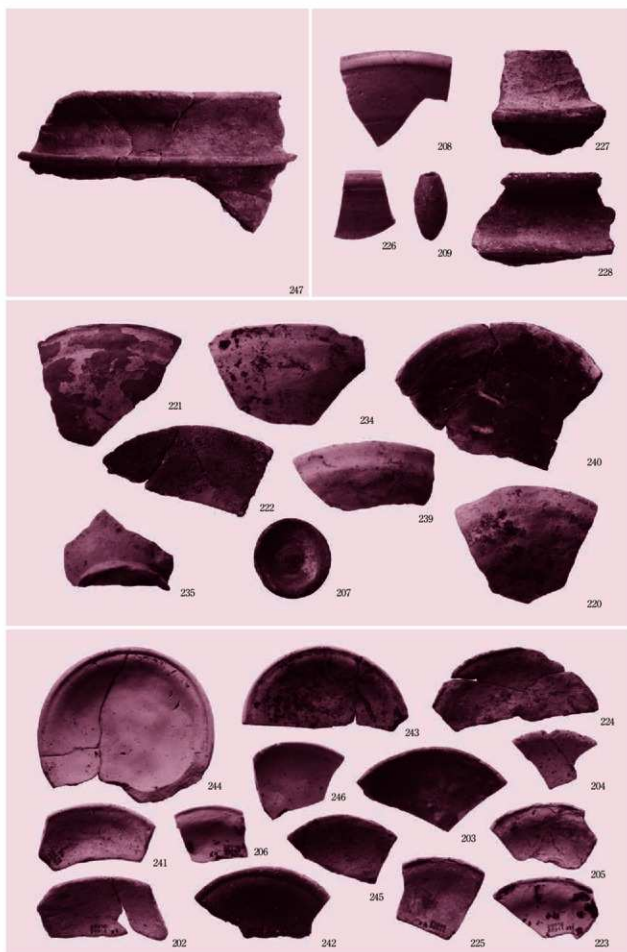
1. 須恵器(密)・土師質土器(羽釜)



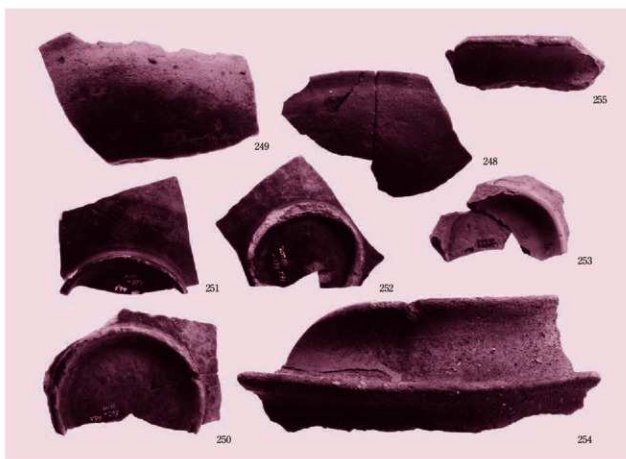
2. 土師器(亮)・土師質土器(羽釜)



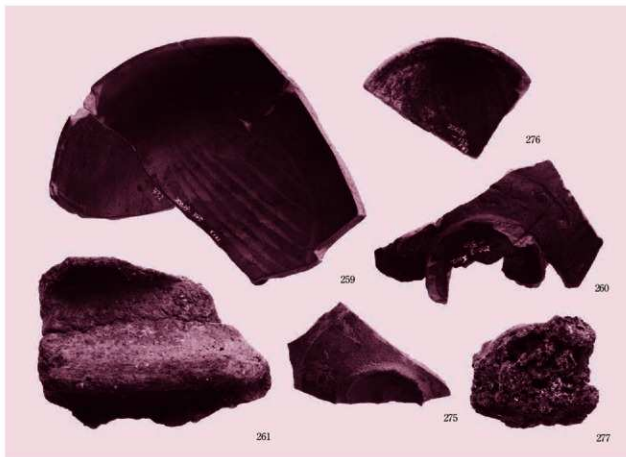
瓦器 (碗・皿)



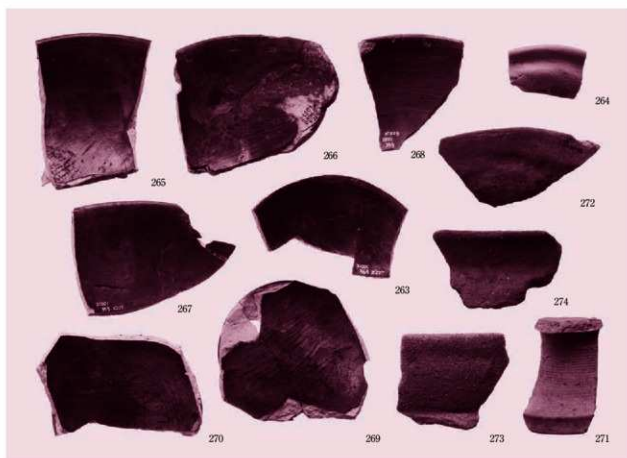
瓦器（碗）・土師器（皿）・土師質土器（羽釜）・白磁（碗）・土製品（土鍾）



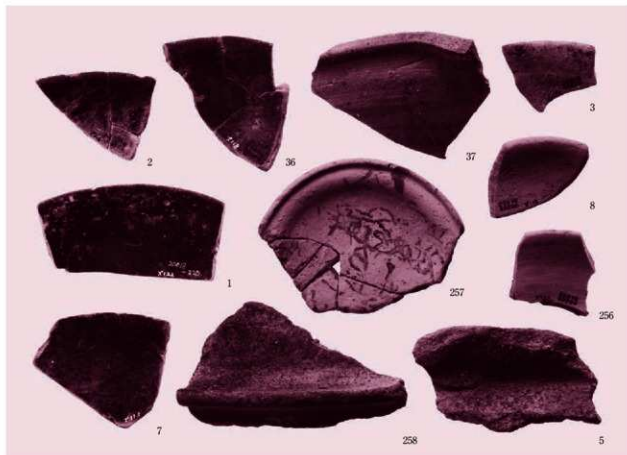
1. 瓦器 (碗)・土師器 (甕)・土師質土器 (羽釜)



2. 瓦器 (碗・皿)・土師質土器 (羽釜)・陶器 (甕)・鉞・鐙



1. 瓦器（輪・皿）・土師器（皿・甕）・須恵器（高杯）



2. 瓦器（輪）・土師器（皿）・土師質土器（羽釜）・須恵器（鉢）

報告書抄録

ふりがな	おおたいせき							
書名	太田遺跡							
副書名	一般府道大阪羽曳野線（八尾富田林線）事業に伴う発掘調査							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2024-3							
編著者名	奈良拓弥（編）・株式会社イビソク							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒 540-8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL 06-6941-0351							
発行年月日	2025 年 3 月 31 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡 番号	° ° °	° ° °			
おおたいせき 太田遺跡	おおたふたふ 大阪府 ふたてでし 藤井寺市 津堂 西丁目	272264	2015	34° 35' 16.08"	135° 35' 9.90"	(20018・ 21001) 20201201 ～ 20210721 (23032・ 24003) 20240125 ～ 20240531	(20018・ 21001) 1.344 (23032・ 24003) 194	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
太田遺跡	集落	平安時代後期～鎌倉時代前期	掘立柱建物 6、溝、土坑			土師器、須恵器、瓦器、瓦、石製品		
要約	平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての掘立柱建物と溝を検出した。12 世紀半ばから後半にかけて掘立柱建物が 4 棟建てられており、この建物群を区画する溝も検出した。調査区の中央を東西に流れる大溝は 11 世紀後半から機能し、13 世紀初頭には埋め戻されていた。大溝は坪境溝と考えられる。							

大阪府埋蔵文化財調査報告 2024 - 3

太田遺跡

— 一般府道大阪羽曳野線(八尾富田林線)事業に伴う発掘調査 —

発 行 大阪府教育委員会

〒 540 - 8571 大阪市中央区大手前二丁目

TEL 06 - 6941 - 0351 (代表)

発行日 令和 7 年 3 月 31 日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒 537-0002 大阪市東成区深江南二丁目 6 番 8 号